

第54回東京都公民館研究大会記録

日時 平成30年（2018年）2月3日（土）

午前10時～午後4時

会場 狛江市民ホール（全体会、基調講演）

狛江市立中央公民館（第一、三課題別集会）

狛江市防災センター（第二、四課題別集会）

主催 東京都公民館連絡協議会

大会事務局 狛江市公民館

目次

第 54 回東京都公民館研究大会開催要項.....	1 ~ 2
当日配布プログラム.....	3
東京都公民館研究大会の開催にあたり.....	4
挨拶.....	5
歓迎のことば.....	6
全体会式典.....	7 ~ 9
基調講演：高尾戸美氏.....	10~25
課題別集会.....	26
第一課題別集会（国分寺市）.....	27~38
第二課題別集会（国立市）.....	39~58
第三課題別集会（都公連職員部会）.....	59~70
第四課題別集会（都公連委員部会）.....	71~81
アンケート結果.....	82~98
第 54 回東京都公民館研究大会参加状況.....	99



第54回東京都公民館研究大会開催要項

東京の公民館の未来 ～持続可能な地域、次世代の学びに向けて～

1 開催趣旨

わが国の首都であり、東京2020オリンピック・パパラリンピック競技大会を控え国際化の進展も著しい大都市（東京）において、今なお、豊かな自然や地元の歴史と紐付いた様々な地域資源を有し、多くの大学や研究機関なども集積している多摩地域、

得楽にわたり、魅力にあふれる地域であり続けるための大きな可能性を持つ本地域には、現在18市に71館の公民館が設置されています。

戦後、各地で建設が進められた公民館は、住民の学びや活動の場として、また、地域課題に取り組みたいの拠点として、長年、時代とともに様々な役割を果たしてきました。一方で、時代の変遷とともに、私たちの生活スタイルや地域のコミュニティのあり方など、暮らしを取り巻く環境は大きく変わりました。とりわけ、東京においては、その速度や多様化は著しい状況といえます。

基調講演や事例発表等からもより、東京の公民館に関わる英知をここに結び、今大会が東京の公民館の未来に向けた飛躍的な発展の機会となることを期待します。

- 2 主催 東京都公民館連絡協議会
- 3 後援 東京都教育委員会、東京都市長会、東京都町村会、東京都町村教育長会、東京都町村教育委員会連合会、狛江市教育委員会
- 4 参加者 市民、公民館運営審議会委員、公民館職員、社会教育関係者、生涯学習関係者
その他本研究大会に関心のある方
- 5 日時 2018年（平成30年）2月3日（土）
午前10時～午後4時
- 6 会場 狛江市民ホール（エコルマホール）・中央公民館 ほか
- 7 星食 お弁当の輪はありませんで、各自でご用意いただくか、狛江駅周辺の飲食店をご利用ください。
- 8 プログラム 午前9時30分 開場・受付（狛江市民ホール（エコルマホール）ホワイエ）
午前10時～11時30分 全体会（狛江市民ホール（エコルマホール））
午前11時30分～午後0時30分（昼食休憩1時間）※狛江市民ホールは飲食禁止
午後0時30分～4時 課題別集會（各会場にて）
（全体会、課題別集會等の内容については、裏面をご覧ください）

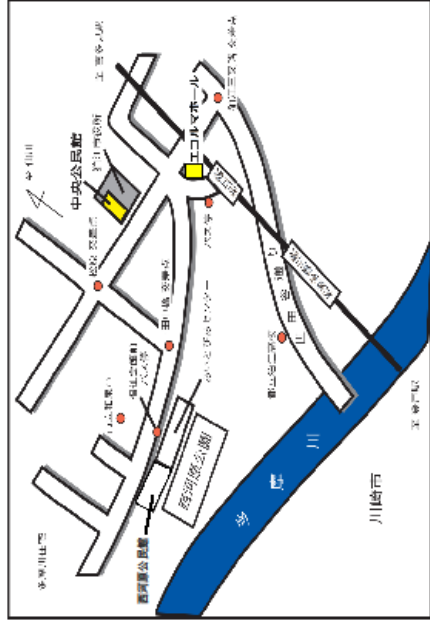
9 参加費 1,000円

- 10 申込方法 別添の申込書により12月15日（金）までに、参加費を添えて在住市の公民館及び社会教育施設までお申し込みください（公民館及び社会教育施設は参加者を取りまとめるうえ、次の参加費等振込先にお振り込みください）。
- ※お申し込み後の参加費等の返金はできません。
- ※会場のお客員等により、ご希望の課題別集會に参加できない場合もあります。
- 申込書には必ず第3希望の集會名までご記入ください。
- ※手配通訳をご希望の方は、申込書にその旨ご記入ください。

- 参加費等振込先
みずほ銀行 狛江支店
普通預金（口座番号）1305748
（口座名義）東京都公民館連絡協議会
東京都公民館研究大会事務局 長 加藤達朗

- 11 問い合わせ 第54回東京都公民館研究大会事務局
狛江市教育委員会 教育部公民館事業係 〒201-0013 狛江市元和泉二丁目35番1号
電話 03-3480-3201 F AX 03-3480-3203
Eメール tokukem2017@city.komaie.jp

- <会場案内図>
狛江市民ホール（エコルマホール）（所在地）狛江市元和泉一丁目2番1号
中央公民館・防災センター（所在地）狛江市和泉本町一丁目1番5号
※お車でご来場の方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。



第 54 回 東京都 公民館 研究 大会 開 催 内 容

全 体 会 午前10時 ～ 11時30分

テーマ「東京の公民館の未来 ～持続可能な地域、次世代の学びに向けて～」

基調講演 高尾 戸美 氏 (日本サイエンスコミュニケーション協合理事・合同会社パーソナルワークショップ代表)

課題別集会 (午後0時30分 ～ 4時)

課題別集会名	討議内容	助言者	事例報告者	企画運営委員
第一課題別集会 公民館がまちを創る ～公民館が生み出す 「地域」～	近年、東京の公民館でも、公民館と地域社会とのかがわりが問われるようになり、公民館が地域課題を積極的に学習課題に帯び、「持続可能な地域づくり」の方向を市民とともに考える取り組みが進んでいます。 公民館は「学ぶ」場であり、多くの人たちが集まる場です。公民館であるからこそ、地域の課題を集め、その解決策を話し合い、地域の人やグループを繋ぐ機会や、さまざまな情報との「受信」と「発信」のまめ役として、世代を超えた連携を築くコーディネートができると思います。 国分寺市公民館運営審議会が今年度答申した「地域づくりを目指した公民館のあり方」を参考に、公民館がどのように地域づくりを担っていくことができるかを考えてみたいと思います。	佐藤 一子 氏 (東京大学名誉教授・国分寺市公民館運営審議会委員)	田中 塚 英 郎 氏 (国分寺市公民館運営審議会委員) 富 貴 氏 (埼玉県富士見市友会公民館長)	国分寺市公民館職員
第二課題別集会 公民館の価値をみつ めなおす ～住民とともに公民 館を「評価」する実 践～	公民館の効率的な施設運営や事業実施、また市民に対する説明責任などが求められる今日、公民館の価値を豊かに表現し、広く共有していく必要があります。同時に公民館の危機感が叫ばれる昨今、行政内外に公民館の価値を伝えていくために、社会教育独自の「評価」に関わる取り組みも求められています。 「評価」の主体である市民とともに、公民館事業の意義や課題を社会的に共有し、よりよい活動・事業を市民・職員が協同して研究・検討する二つの事例を通じて、上記の課題について考えたいと思います。	越 村 康 英 氏 (千葉大学非常勤講師)	1「松本市公民館研究集会の取り組み」 横 山 史 樹 氏 (長野県松本市中央公民館) 2「公民館活動をふりかえる会の取り組み」 国立市公民館運営審議会委員・職員	国立市公民館運営審議会委員 国立市公民館職員
第三課題別集会 公民館としての魅力 ある講座とは	魅力ある講座とはいったい何でしょう。思い悩む事例ではないでしょうか。魅力ある講座それは公民館に携わる誰もが一度は、思い悩む事例ではないでしょうか。魅力ある講座が何かを考へる前に、そもそも社会教育施設として、地域の中で公民館がどうあるべきか、公民館の役割について話つきりと認識しておく必要があります。 さらに、魅力ある講座を考へていく中で、これまで参加者にとって魅力に映らなかった講座を見つめなおすことも必要ではないでしょうか。そもそも参加者が集まらなかった講座、集まっただけと満足度が低かった講座。反面、集客も、満足度も申し分なかった講座。 公民館の役割を共有しつつ、これまで開催された講座を検証し、語り、「この時代に、公民館がおこなうべき講座」について考へてみたいと思います。	金 田 光 正 氏 元 (月刊社会教育編集長・元埼玉県富士見市副館長公民館長)	公民館職員及び講座に参加した市民の方など	都公連職員部会運営委員 小宮 山 波 藤 子 文 (小宮市) 南 濱 泰 子 文 (国分寺市) 富 山 藤 子 文 (国分寺市) 山 越 弘 樹 氏 (長野県松本市中央公民館) 今 横 佐 田 菜 穂 氏 (埼玉県富士見市副館長公民館長)
第四課題別集会 地域と公民館を結び つける地域学習を考 える	市民の学ぶ場、集う場として公民館は活躍しています。 若い世代を含めたより多くの人が、公民館を利用して、市民と公民館がより身近な関係になれるよう、考へてみましょう。 いろいろな団体、グループが地域で活動しています。それに向かい、どのように補完しあえるか話していきます。	倉 持 伸 江 氏 (東京学芸大学准教授)	石 毛 和 裕 氏 (熊川分水に親しむ会長代行) 松 田 永 藤 氏 (西東京市公民館運営審議会委員) 遠 藤 尚 弘 氏 (昭島市公民館)	都公連職員部会運営委員 大 白 骨 高 崎 七 三 雄 氏 (昭島市・委員部会副会長) 小 宮 高 崎 七 三 雄 氏 (小宮市) 平 高 井 部 場 上 隆 利 子 氏 (国分寺市) 大 渡 馬 場 井 原 綾 子 氏 (昭島市) 伊 公 連 委員 部 会 事 務 員 伊 公 連 委員 部 会 事 務 員 伊 公 連 委員 部 会 事 務 員 伊 公 連 委員 部 会 事 務 員 伊 公 連 委員 部 会 事 務 員

第54回東京都公民館研究大会

東京の公民館の未来

～持続可能な地域、次世代の学びに向けて～

1 開催趣旨

わが国の首都であり、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を控え国際化の進展も著しい大都市「東京」において、今なお、豊かな自然や地元の歴史と紐付いた様々な地域資源を有し、多くの大学や研究機関なども集積している多摩地域。

将来にわたり、魅力にあふれる地域であり続けるための大きな可能性を持つ本地域には、現在18市に71館の公民館が設置されています。

戦後、各地で建設が進められた公民館は、住民の学びや活動の場として、また、地域課題に取り組むための拠点として、長年、時代とともに様々な役割を果たしてきました。一方で、時代の変遷とともに、私たちの生活スタイルや地域のコミュニティのあり方など、暮らしを取り巻く環境は大きく変わりました。とりわけ、東京においては、その速度や多様化は著しい状況といえます。

基調講演や事例発表等のもとより、東京の公民館に関わる英知をここに結び、今大会が東京の公民館の未来に向けた飛躍的な発展の機会となることを期待します。

2 開催日時 平成30年2月3日 (土) 午前10時～午後4時

3 プログラム

全体会 会場：狛江市民ホール (エコルマホール)	東京の公民館の未来 ～持続可能な地域、次世代の学びに向けて～	基調講演：高尾戸美氏 (日本サイエンスコミュニケーション協会理事・ 合同会社マーブルワークショップ代表)
第一課題別集会 (国分寺市) 会場：中央公民館2階講座室	公民館がまちを創る ～公民館が生み出す「地域」～	助言者：佐藤一子氏 (東京大学名誉教授・国分寺市公民館運営審議会委員長) 事例報告者：田中英郎氏 (国分寺市公民館運営審議会委員) 富塚一資氏 (埼玉県富士見市水谷公民館長)
第二課題別集会 (国立市) 会場：狛江市役所防災センター3階会議室	公民館の価値をみつめなおす ～住民とともに公民館を「評価」する実践～	助言者：越村康英氏 (千葉大学非常勤講師) 事例報告者：横山史樹氏 (長野県松本市中央公民館) 石田進氏 (国立市公民館長) 富田和枝氏 (国立市公民館運営審議会委員長) 三好紀子氏 (国立市公民館運営審議会委員) 井口啓太郎氏 (国立市公民館)
第三課題別集会 (都公連職員部会) 会場：中央公民館地下1階ホール	公民館としての魅力ある講座とは	助言者：金田光正氏 (月刊社会教育編集長・元埼玉県富士見市鶴瀬公民館長) 事例報告者：筈本孝文氏 (小金井市公民館本館) 富田泰之氏 (東大和市蔵敷公民館)
第四課題別集会 (都公連委員部会) 会場：狛江市役所防災センター4階会議室	地域と公民館を結びつける地域学習を考える	助言者：倉持伸江氏 (東京学芸大学准教授) 事例報告者：石毛和夫氏 (熊川分水に親しむ会会長代行) 石田裕子氏 (西東京市公民館運営審議会会長) 松永尚江氏 (西東京市田無公民館専門員) 遠藤弘文氏 (昭島市公民館)

4 主催 東京都公民館連絡協議会

5 後援 東京都教育委員会、東京都市長会、東京都町村会、東京都市教育長会、東京都町村教育長会、東京都市町村教育委員会連合会、狛江市教育委員会

東京都公民館研究大会の開催にあたり

第 54 回東京都公民館研究大会に多数のご参加をいただきました事を心より御礼申し上げます。

さて、昨年度の福生市での研究大会同様、全体会と課題別集会の 2 部制での開催となり、本年度の研究大会では、全体テーマを「東京の公民館の未来～持続可能な地域、次世代の学びに向けて～」とし、基調講演及び 4 つの課題別集会在実施されることで、有意義で実りのある研究大会となることを期待しております。

開催趣旨にもあるように、各市の公民館は、魅力あふれる地域であり続けるための大きな可能性を持つ本拠地として、住民の学びや活動の場として、地域課題に積極的に取組み、その時々において様々な役割を果たしてきました。しかし、時代の変遷と共に、生活スタイルや地域コミュニティのあり方など私たちを取り巻く環境が大きく変化し、とりわけ東京はその速度の速さ、多様性は著しく変化しています。このような中、公民館の持つ本来の意義を再確認し、住民自らが課題解決をし、自治力の向上ができるよう、改めて公民館がそれぞれの地域で発信していくことの重要性を感じています。

昨年度は「公民館の設置運営について」の文部次官通牒が通達されて 70 年目の年でしたが、その翌年の今年度は、これからの公民館の第一歩の年となるよう、この研究大会に参加された皆様と共に考えていきたいと思えます。

結びに、本大会の事務局をお引き受けいただいた狛江市公民館の皆様、課題別集会の準備にご尽力いただいた、国分寺市、国立市ならびに東京都公民館連絡協議会の委員部会、職員部会の企画運営委員の皆様、お忙しい中、課題別集会の助言者および事例報告者をお引き受けいただいた皆様、また、本大会開催に当りご支援、ご協力いただきました関係機関、関係者の皆様に、東京都公民館連絡協議会を代表し、心より感謝を申し上げますと共に、公民館活動がより盛んになることを願ってご挨拶とさせていただきます。

平成 30 年 2 月 3 日

東京都公民館連絡協議会
会長 大橋 一 浩

挨拶

第54回東京都公民館研究大会が、開催市の狛江市の皆様をはじめ、東京都公民館連絡協議会の関係者の方々の御尽力によりまして、盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

また、本研究大会に御参加の皆様方におかれましては、日々、各地域の公民館における諸活動を通じ、住民の教養の向上や生活文化の振興、地域の課題解決等に取り組まれていることに対し、深く敬意を表します。

さて、戦後社会教育の基幹施設として整備が行われた公民館は、開設当初の理念を堅持しながら、各時代の状況に応じて住民の学習課題に柔軟に対応するなど、地域における生涯学習・社会教育の中核的な拠点として活力とうるおいのある地域社会の実現に寄与してまいりました。

しかしながら、近年の少子・高齢化、情報技術の高度化、ライフスタイルや価値観の多様化など、社会を取り巻く状況が急速に変化する中で、過去に例がないような社会的課題が発生し、公民館においてもこれらの課題に対応した人材の育成や、住民相互の絆づくりを通じたコミュニティの活性化など、新たな地域づくりに向けた役割が期待されております。

本日、「東京の公民館の未来～持続可能な地域、次世代の学びに向けて～」をテーマに、東京の公民館の英知を結び、未来に向けた飛躍的な発展の機会として、参加者相互に研究・協議することは誠に時宜を得たものであると考えます。

本研究大会の成果を生かした活動が、各地域の公民館に広がっていくことを期待しております。

結びにあたり、本研究大会が実り多いものになりますことと、皆様方の御健勝と御活躍を祈念申し上げまして、挨拶といたします。

平成30年2月3日

東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課
課長 大木 琢

歓迎のことば

本日は、狛江市で行われる第54回東京都公民館研究大会に、多数の皆様のご参加をいただき誠にありがとうございます。

また、本日の大会を開催するにあたり、東京都公民館連絡協議会役員会、同委員部会、同職員部会、並びに国分寺市と国立市の公民館職員の皆様に加えて、前年度開催市であります福生市公民館職員の皆様に、多大なるご協力をいただきましたことを感謝申し上げます。

さて、東京は2年後にオリンピック・パラリンピック競技大会の開催を控え、国を挙げて準備が進められています。

他国の某旅行雑誌が行った世界で最も魅力的な都市を決める読者投票ランキングでは、東京が2年連続で第1位に選ばれるなど、国際的に注目が高まっています。世界有数の国際観光都市東京の中でも、多摩地域は豊かな自然や郷土の歴史と結びついた地域資源を有し、また多くの大学や研究機関なども集積しています。戦後から長きに渡り、この地域の公民館は住民の学びの場として、また地域課題に取り組むための拠点として、地域コミュニティの支えとなってまいりました。

しかし、時代の移り変わりとともに、人々の生活スタイルや地域コミュニティは変化し、首都東京で公民館が果たす機能や役割なども、これまでとは変わってきています。

このような中で、首都東京において、公民館の数ある役割の中でも、時代に合わせた「学び」を未来に渡って提供し、公民館に集う方々や地域コミュニティの醸成のため、「人」と「人」、「人」と「地域」、「人」と「学び」を「繋ぐ」ことが、重要になっています。

本日の大会では、基調講演や各課題別集会をとおして議論検討を深めていただき、各公民館の発展的な運営に寄与することを祈念申し上げ、歓迎の言葉とさせていただきます。

平成30年2月3日

第54回東京都公民館研究大会事務局長
狛江市公民館長 加藤達朗

全体会

1 主催者挨拶

東京都公民館連絡協議会会長 西東京市公民館長 大橋一浩
東京都公民館研究大会の開催にあたり（プログラム掲載） ※4ページ
参照

2 来賓祝辞

狛江市副市長

水野 穰

本日は、「第54回東京都公民館研究大会」にご案内いただき、誠にありがとうございます。

ただいま、ご紹介いただきました狛江市副市長の水野でございます。

皆さま、本日はようこそ狛江市にお越しくださいました。

ここで少し、当市のご紹介をさせていただきます。

当市は、新都心新宿から南へ14キロメートル、小田急線で約20分の位置にございまして、東は世田谷区、西は調布市、南は多摩川を挟んで神奈川県川崎市に隣接しております。

面積は6.39平方キロメートルで、埼玉県蕨市について、全国で2番目に小さい市でございますが、平成30年1月1日現在の人口は、8万1千788人となっております。人口密度が高いという特徴のある街でございます。

しかし、市域北側には野川、また南側には多摩川といった一級河川があり、また、市内には農地や緑地といった多くの緑も残されておまして、このような状況から、「みずとみどりのまち-こまえ-」とさせていただきます。

今年の8月8日には、多摩川を挟んだお隣の川崎市と連携いたしまして、3年ぶりに花火大会を開催する予定とされているところでございます。また、年間をとおしまして、様々なイベントを数多く開催しておりますので、皆さまどうぞこの狛江市に脚をお運びくだされば幸いです。

さて、今回の東京都公民館研究大会では、「東京の公民館の未来 持続可能な地域、次世代の学びに向けて」をテーマといたしまして、開会式のあと、午前中は基調講演、午後からは4つの課題別集会を実施されると伺っております。この講演と集会の中で、公民館本来の意義を再認識し、未来に向けた地域コミュニティの醸成におきまして、公民館が果たす役割などにつきまして、議論や検討を進めていただければと考えているところでございます。

平成32年に市制施行50周年を迎える当市におきましても、他の市と同様に長い歴史の中で、他の地域から移り住んでこられた市民の割合が高くなり、地域コミュニティの維持は、大変難しいのが実情でございます。そのなかで地

域の方々が集い学ぶ公民館は「顔と顔の見える関係作り」の構築に重要な施設であると認識しております。

本日はご忌憚のないご意見を出し合っていていただき、実り多い研究大会となりますことを願っております。

最後に、本日狛江市にお越しくございました皆様のご健勝とご多幸、並びに東京の全ての公民館のますますのご発展を祈念申し上げまして、私のあいさつとさせていただきます。

3 祝辞披露

東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長大木琢様からの祝辞（プログラム掲載）の紹介 ※5 ページ参照

4 来賓紹介

東京都教育庁地域教育支援部主任社会教育主事 梶野光信
狛江市教育委員会教育長 有馬守一

5 主催者紹介

東京都公民館連絡協議会副会長・福生市公民館長 佐藤克年
第54回東京都公民館研究大会事務局長・狛江市公民館長 加藤達朗

6 閉会挨拶

東京都公民館連絡協議会副会長
福生市公民館長 佐藤克年

ただいまご紹介いただきました東京都公民館連絡協議会副会長・福生市公民館長をしております佐藤でございます。本日は早朝より第54回東京都公民館研究大会の開会式にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

本日はこの後に「東京の公民館の未来～持続可能な地域、次世代の学びに向けて～」をテーマに日本サイエンスコミュニケーション協会理事・合同会社マーブルワークショップ代表の高尾戸美先生により基調講演をいただきます。午後からは四つの会場に分かれ、課題別集會が行われます。また平成30年度第55回東京都公民館研究大会につきましては東大和市が会場となり、実施する予定でございます。

本日は1日、長時間とはなりますが、今後の公民館活動の発展のために、基調講演そして、課題別集會が実りあるものになるよう願っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

7 基調講演講師紹介

本日の講師である高尾先生は、北海道教育大学大学院教育学研究科を修了後、国立科学博物館の勤務、国内外のチルドレンズミュージアムの視察調査、全国のようなミュージアムの展示設計に従事され、ミュージアムと人の関わり方を捉えなおすため、2011年にワークショップを通じて人々の学びの場の創出を目指したマーブルワークショップを設立されました。2017年2月からは、多摩六都科学館の研究・交流グループリーダーとして勤務する傍ら、大学講師として人材育成にも力を注いでいらっしゃいます。

8 基調講演

日本サイエンスコミュニケーション協会理事
合同会社マーブルワークショップ代表 高尾 戸美

皆さんおはようございます。

一番初めに皆さんに私が話ししている間、協力してもらいたいことがあります。その説明をさせていただきたいと思います。お渡ししております資料の中に、黄色とピンクの折り紙が入っています。私の話の中に2回くらい質問コーナーを設けます。その時に使いたいと思いますのでお手元にご用意ください。それと、事例紹介で使いますので「ロクトニュース」と「催しもの案内」もお手元にご用意いただければと思います。



今日お話しさせていただくのは、最初に「はじめに」、2番目に「博物館とは」、3番目は「博物館の活動事例紹介」、4番目に「博物館とコミュニティ」、5番目に「おわりに」ということで5つの構成でお話しさせていただければと思います。

さっそく「はじめに」です。

先ほどご紹介もいただいたのですが、今私がやっていること、会社で働きながら、会社で学芸員を業務委託でやらせていただいております。西東京市にあります多摩六都科学館というところの研究交流グループのリーダーをさせていただいております。

こちらに概ね週5日ほど勤務して、それ以外の日にちを使って全国の科学館や博物館のミュージアムプランニングやワークショップデザインとしていろいろなところのプログラムを作って実施するなどさせていただいております。そ

の他、大学の非常勤講師、そして、2019年京都で開催されます国際博物館会議の大会の運営委員をさせていただいております。この他、サイエンスコミュニケーション協会の理事も務めています。

これからお話しさせていただくのは、私のプチヒストリーになります。なぜそのお話しをさせていただきたいかというと、私が社会教育というものに興味を持って、今まで25年間、関わってきたことに関係するため、お話しさせていただきます。

博物館の勤務経験では、今まで3つの博物館で働いてまいりました。「札幌市豊平川さけ科学館」は私の地元にある小さな科学館です。ここでの経験が、私はずっと博物館とともに生きていきたいと思った所です。そして、東京に出てきてからは、上野にあります「国立科学博物館」、ここでは広報関係の仕事をさせていただきました。主に担当していたのはホームページを作る仕事です。企画して、作って、公開するということまですべてさせていただいております。後ほど紹介しますが、展示を作る仕事として、ディスプレイの企業であります乃村工藝社というところのプロジェクトに10年以上参画してきて、昨年の2月より多摩六都科学館の現場に復帰した形になります。

私のエポックメイキングとなったミュージアムはこちらです。左の写真、川で鮭を計っている写真がありますが、横で計測しているのが大学生時代の私です。川の中で投網を投げて鮭を捕まえ、実測したり、隣のように人工受精をして育て、川に戻したりという作業をしています。こうした取組みを一般市民に伝えるという仕事を学生時代からボランティア、アルバイトとして経験してきました。この中で、博物館という仕事がどれだけ素晴らしいものだろうということを実感しましたので、今日に繋がっております。

次に博物館の展示作りに携わりました。実は博物館で展示作りをする経緯になったときは、上野の国立科学博物館では非常勤職員という身分でした。期限付きでしたので、その先どこかの博物館に行きたかったのですが、いろいろな事情があって行けませんでした。その時に偶然、ご縁のありました乃村工藝社さんに行くことができました。この体験が非常に重要で、今日に繋がっています。私が乃村工藝社と関わって展示を作っていたこの時期に、全国の科学館、郷土資料館、博物館等の立ち上げからリニューアル、まちづくりにまで、いろいろなことに携わらせていただくきっかけをいただきました。全国でも60以上のプロジェクトに参加させていただけたと思います。

なかでも、一番初めに私が関わったのは文部科学省にある情報広場の科学技術・学術コーナーでした。こちらの展示の情報設計をすることで、いろいろな学びのなかで展示を作っていたというのがとても印象に残っております。

そして、大きなプロジェクトとして最後に参画したのが、2015年の国立科学博物館の地球館1階の改装です。こちらは今皆さんに見ただけの展示としてあるのですが、このあと写真を見せたいと思います。

最近に手がけたものは、今勤務しています科学館の企画展です。「パズル島へようこそ」というディレクションを担当しました。上野の国立科学博物館の地球館1階、地球史ナビゲーターも担当しました。こちらは構想の時から、研究者の皆さんといろいろお話しをさせていただいて作ったものです。どういうものを表現していくのがいいのかというのを研究者の皆さんと話しをしながら作っていくというのが仕事でした。こちらは、もともとは海洋展示をしていたので、あまり空間としては地球史関係の紹介をするようなところではありませんでした。国立科学博物館地球館は6フロアがあり、非常に面白いのですが、何を伝えているか分からないということがありました。一階には地球史が分かるナビゲーターができるような展示をしたいというコンセプトのもと、リニューアルを行なったという経緯があります。

以上、多くの展示を作ってきて、とても楽しかったのですが、虚しさも同時に残りました。なぜかと言いますと、展示は作ってしまったら、クライアントさんに渡してしまうものだからです。つまり、どんなに一生懸命考えて一緒に作り上げていっても、運営してくださるのは博物館の皆さんです。もともと現場にいた人間ですからそれもわかってはいるのですが、さびしいなと思っていました。その中で私ができることを考えて、もしかしたらプログラムを作って、一緒にやるということをやっていけば、もう一度博物館の現場の方と一緒に、市民の方と繋がることのできるのではないかと考え、ワークショップデザインの勉強をして、ワークショップデザイナーという資格を取りました。

その活動を始めたのは今から7年前です。2011年の震災の直後にワークショップデザイナーの資格を青山学院大学で取りました。それ以降、全国の博物館で分野も問わず、いろいろなプログラムを作って体験させていただきました。年間100回以上ワークショップをやっておりますが、最近はそこまでできていないのですが、私自身新たに勉強しましたし、いろいろなことができました。人文系・歴史系の博物館では、まち歩きのプログラムをやったり、アニメーション作りをやったり、テーマに関する工作のほか、テーマを体験してもらうプログラムを行っていました。写真の子ども達の目の前に高齢の男性が座っているのは、大磯町の郷土館でやらせてもらったものです。昔の大磯町がどういうところだったのかというのを地元の方にお話しを聞いて、それらを自分たちがアニメーションで作るというのを子ども達がやりました。水族館、動物園では、動物の観察をした後に、それらをどう表現するかというのを、私たちのいろい

ろな仲間を通じて、例えば、演劇関係者の人がいたら、演劇とコラボレーションして水族館でプログラムを実施したり、動物園ではダンサーの方と一緒に、ダンスで動物の動きを表現するプログラムを実施したり、動物の動きをアニメーションで表現するプログラムを展開しました。

科学館では、同じくアニメーションや3Dプリンターを用いたプログラムも実施していました。これ以外に主に多摩六都科学館に勤めてからなのですが、外の自然観察会などもたくさんやらせてもらえるようになりました。併せて、インフラとの繋がりを伝えるために、廃油を使ったキャンドル作りのプログラムもさせていただいております。多摩六都科学館では、できるだけ地域に繋がりがあったり、常設展示と繋がりがあったりするものからプログラムを企画して行うという形になっています。

現在、私と博物館の関係と申しますと、合同会社マーブルワークショップが私の立ち位置になります。今、ホームページとして多摩六都科学館ができましたが、それ以外にも他の博物館とも色々関わっています。また多摩六都科学館の立場でありながら、行政や学校の方々、また、地域の方や社会福祉協議会の方と一緒にプログラムを開発・実施するというのもしております。自分の立ち位置、自分と施設の関係性というのを時々見直してみるの大切だなと考えています。

私がこのような活動を通じて目指しているものは、ミュージアムとあらゆるものを繋ぐということです。ミュージアムというのは場所だけではありません。人だったり、物事だったり、あとは地域だったりします。そのようなものと何を繋ぐのかというのは、その場所、時によって変わってきます。そういうお題があって、それらをどのように皆さんに体験してもらうのか、どのように伝えるために展示を作るのか、そういうことを考えながら、今もこれからもやっていきたいと考えております。

次に本題として、「博物館とは」というところに入っていきたいと思います。

博物館とは皆さんもちろんご存知かと思いますが、ここで定義を確認しておきたいと思います。博物館は博物館法というものにおいて位置付けられています。社会教育法に基づいている公民館と同じような仲間です。社会教育の仲間ですが、少し違うところもあるかもしれません。私たちも教育に関わりますが、博物館は、学術および文化の発展に寄与するところですが、特に学術というところが公民館とはもしかしたら違って来るかもしれません。

博物館の定義としましては博物館法第2条に書かれておりますとおり、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学の資料を収集・保管する。そして、それらを展示

して教育普及すること、調査研究もするのですが、それがメインの活動になっております。最近はこの定義もこれからの組織改編の影響が出てくるかなと思っております。日本の博物館法だけでは捉えにくいところがありまして、来年京都で開催される国際博物館会議（ICOM）の大会の定義によりますと、遺跡ですとか、科学館、動物園、水族館、プラネタリウム、最近ですと、地質系のジオミュージアムもすべて博物館に該当するというような定義を打ち出しております。博物館の定義そのものが広がってきているというふうに私たちは受け止めております。一方で、非営利であることとか、そういうところをICOMは謳っておりますので、私たちも今後、例えば、観光資源としての博物館が求められつつありますが、そのあたりはどうバランスを取っていくのかということも課題となっていると思っております。

それでは、皆さんここで折り紙をご用意ください。これから皆さんに質問をしたいと思っております。今ここに書いてありますが、日本に博物館はいくつあるかということを知りたいと思っております。三択にします。1番、1,000くらいだと思



方は黄色を上げてください。2番、6,000 くらいかなと思の方はピンクを上げてください。3番、10,000 くらいもしくはそれ以上だと思の方は白を上げてください。間違っても退場はしなくて大丈夫なので、直感で上げてください。よろしくお願いいたします。

野鳥の会の方がいないので正確な数は出せないのですが、ピンクが多いかもしれませぬね。ありがとうございます。正解は、おおよそなのですが、6,000 館くらいです。20年前の調査ですが、急速に博物館が増えているわけではありませぬので、大きく数は変わっていないと思っております。博物館法の規定のなかの博物館というのは、登録博物館、博物館相当施設はこの図で見ますと、紫のところですよ。すごく少ないですね。それ以外の、博物館類似施設とって、博物館法では定まっていない博物館の方が圧倒的に多いです。これらは法的な制度の問題があつて、登録博物館、博物館相当施設になっていない博物館というのがたくさんあります。ですが、類似博物館施設だからとって博物館の質が悪いのかといたら決してそういうわけではありませぬ。その中に入っているのは、むしろ観光などに特化した行政の作った施設などが増えてきている傾向があります。

約6000ある博物館ですが、どのような種類があるのかというのがこちらになります。圧倒的に多いのが、歴史系の博物館です。60パーセントくらいが歴史

系です。美術系が 20 パーセント。そして、私がおります科学博物館は 8 パーセントということで、全体の 10 パーセントにも満たない少ない施設です。私が教えている帝京科学大学は動物が大好きな学生が多く、動物園や水族館などに勤めたい学生ばかりです。そこでこの図を見せると、ため息が出ます。せっかく学芸員の資格を取っても、なかなか勤められない狭き門であるのは可哀想だと私も思っているところですが、日本の博物館の現状としてはこのようになっていきます。

以上、少し駆け足になりましたが、博物館がどういうものであるのかというのを紹介させていただきました。

続きまして、多摩六都科学館を中心としました博物館活動の事例紹介をさせていただきますと思います。ここで、再び折り紙が登場いたします。皆さん、またご用意をお願いいたします。多摩六都科学館を知っていますかという質問です。知っている方が黄色、行ったことがある方はピンク、知らなかったという方は白でお願いします。

ありがとうございます。結構ピンクの方がいらっしゃいますね。もしかしたらピンクが一番多いかもしれません。これは実は予想していなかったですが、ありがとうございます。もし、今白をあげた方がいらっしゃったら、これから知っていただくので、次挙げるときは黄色でお願いします。

多摩六都科学館は 1994 年に開館しました。3 月に開館しておりますので間もなく 24 周年を迎えます。この科学館は、西東京市、小平市、東村山市、東久留米市、清瀬市の 5 つの市が運営している科学館です。多摩六都科学館組合が設置者となり、2012 年からは乃村工藝社という私がもともと関わっておりました企業が指定管理者として運営しているミュージアムです。

昨年度の実績では年間 25 万人のお客様を迎えることができました。多摩六都科学館という名前の由来ですが、多摩六都、こちらは 6 つの市が作った科学館という概念で作られております。西東京市は、皆さんご存知だと思いますが、もともとは田無市と保谷市の 2 つに分かれておりました。2 つをばらばらに考えますと、6 つの市が作った科学館、ということで多摩六都科学館という名前がついています。愛称は、「六都」です。

多摩六都科学館は、5 つの基本理念を持っております。その基本理念を持ってスタッフそれぞれが活動していこうとしています。ですが、これはひとつひとつ覚えるのはなかなか大変でして、毎年スタッフとの面談をするときに、5 つ言ってみると上司に言われたら、「えっと、なんだったっけ」と言っている人も実はいたりします。ですが、合言葉としては、「Do Science」ということで、この気持ちだけは忘れずに皆、頑張っています。

私たちのミッションについて説明させていただきたいと思います。こちらは多摩六都組合で公開しております、「多摩六都科学館第二次基本計画ローリングプラン2016」というものがウェブ上でも公開されております。この中で、ミッションを上のところに掲げております。それに基づいた役割として、学びの場の創出ですとか、地域づくりの貢献とかを挙げているのですが、これは見づらいなので、ミッションステートメントだけ書き出しました。こちらを読ませていただきます。「多摩六都科学館は地域の皆様をはじめとする様々な方々と共に、誰もが科学を楽しみ、自分たちの世界をもっと知りたいと思える多様な学びの場を作りあげていきます。そして、多摩六都科学館は科学の幅を広げ、皆さんを繋ぎ、地域づくりに貢献することを目指します。」と掲げています。ここで注目していただきたいのは、この赤文字にしているところです。私たちが進めているものは、中核事業としての多様な学びの場の創出、それと併せて地域拠点事業としての地域づくりがあります。普通の博物館においては、その館の持っている特性を活かしたプログラムを展開していくことに重きをおいています。ですが、当館といたしましては、この地域づくりというものに関しても同じくらいに力を入れていこうと活動を進めさせていただいております。多様な学びの場というのは、この4つを中心にしております。先ほど言いました「Do Science」という合言葉は科学による学び、こちらは4つの中心になる部分です。これを外してしまっただけとはいけないということは全てのスタッフが心がけております。そしてこちらを基に、様々な科学館の中にある展示室では、自ら体験することで実感を伴った理解をしてもらおう体験型のプログラムを多く提供したいと考えております。併せて、この後紹介しますが、当館の持っているプラネタリウムは、映像をただ流すだけということはありません。スタッフがそれぞれ生で解説を行なっています。スタッフは6名おまして、それぞれが違った語りをします。テーマは同じで2ヶ月に1度オリジナルのコンテンツを作っております。こちらを基に、6人それぞれが考えて、投影するものを異なるものにしたたり、語り方は女性でソフトであったり、元気のいい男性スタッフがいたり、美声でうっとりして眠くなってしまうような解説をしてくれたりだとか、個性の豊かな生解説が特徴です。

ロマンチックな話をしたり、子ども向けに元気なお話しをしたり、お客様に合わせて解説をするというのが、私たちも同じ仲間としてもとてもいいなと思っているところです。

そして、最後のところですが、様々な分野のプログラムですが、入門から発展までを用意するという事です。色々な人が来て、自分の興味、関心に合わ

せて体験してもらえそうな場を作ろうということを中心にしています。地域づくりですが、こちらは多摩六都科学館という場そのものが地域コミュニティの生涯学習の拠点となることを目指しています。

ただ、公民館のように住民に非常に近くて、活動も住民主体でできているところと比べると、私たちはまだまだコミュニティの拠点になるというのはおこがましくて、道のりは遠いと思っております。ですが、私たちも同じ社会教育施設の一つとして、このような場を目指していきたいという志は持って活動を進めているところです。

ところで、多摩六都科学館といえば、皆さん行ったことがあるという方がたくさんいました。まず、最初に思い浮かべるのは、恐らくですが、プラネタリウムなのではないかと思います。実はこのプラネタリウムはギネス記録を持っています。ケーロン2という機械を6年前に導入しました。この機械を入れたことで、LEDの星の数をたくさん投影できるというギネス記録です。たくさんメディアにも取り上げていただきまして、プラネタリウム目的でいらっしゃるお客様が今でも大変多いです。私たち研究交流グループは、このことに少し嫉妬しているのですが、私たちも一生懸命頑張っております。毎日プログラムを開催しております。多摩六都科学館にいつ来ていただいても何か体験ができるというようなことで、いつでも楽しんでもらえたらと思っております。

多摩六都科学館で実施するプログラムは年間で、少しおかしな数がでておりますが、432日です。これは、土・日・祝日と学校の長期休みの実施日数です。プログラムの数としては110本なのですが、365日、開館日はそれより少ないのですが、それを超えるくらいプログラムを実施しているということになります。プログラムの種類は、先ほども少しでてきましたが、実験だったり、工作だったり、あとは観察物だったりがあります。観察などは、屋外に出ていくプログラムもたくさんあります。難易度は易しいものから発展まで色々あります。これらを掛け合わせたプログラムというのが、先ほどの432日開催、110本のプログラムということになります。

対象は、どなたでも参加できるものから小さなお子様向け、そして大人向けなど様々なものを展開しています。科学を理解してもらおうという観点から言いますと、実は小学校4年生以上をターゲットにしたほうが分かり易いものがたくさんあります。ですが、お客様のニーズというものを考えますと、圧倒的に最近では低年齢化が進んでおります。3歳、4歳くらいのお子様、あとは、お兄ちゃんお姉ちゃんとともにやって来る赤ちゃんですとか、1歳、2歳児の方も増えてきています。これからはその方達も主役になれるプログラムというものが必要になるかなと思っております。ただ、今こちらの表でいきますと、外部委

託と書いてありますとおり、私たちのところでは保育士の資格をもったスタッフがおりますが、そちらの方までは実はまだケアできておりません。ですが、外部の方と手を組むことでこのようなプログラムを組むことを提供しております。

先ほど少し話しすぎてしまってお見せできなかったのですが、「ロクトニュース」と「催しもの案内」を見ていただきますと、私たちのやっているプログラムの一部をご覧いただくことができます。研究機関と協力してやっているものや、私たちだけでやっているものも当然あります。あとは、この中で紹介したいのは、図書館関係と繋がっているプログラムです。「たまろく☆サイエンスラボ」というのはボランティアさんがやっているプログラムです。このように当館のスタッフだけではなくて、他のプログラムをやってくれる仲間、ネットワークがあります。色々な人たちの協力をもとにやっているプログラムですが、ロクトニュースを見ていただけるとわかるかと思います。

このロクトニュースは大体 20 万部くらい発行しております、先ほど紹介しました 5 市の小学生一人一人の手元に届くように作られています。これらの主なプログラムですが、私どもの所属しておりますグループのたった 10 名で企画・調整・運営というところまでやっております。外部委託をする場合でも、必ず調整ですとか、作るということが必要となりますので、結構、皆、日々頑張っているなど私も思っています。また、常設展示の展示替えや年に 4 回行っています企画展示、それらも皆で分担して担当しています。時々、それらのグッズ開発なども行い、ショップで売るといこともさせていただいております。

それでは、今紹介しましたプログラムの事例を少しずつ紹介したいと思います。

最初の事例としてラボプログラムです。ラボプログラムというのは、当館の常設展示室 5 つのうち 4 箇所体験ブース的な場所、ラボというようなものを設けております。そこで行うプログラムです。

基本的には毎日開催しております、誰でも何かを体験できるということになっています。こちらの表で見ていただくと、2月3日、根っこを観察してみよう、あとはその隣、2月3日、4日、シャカシャカ静電気コップを作ろうなど、これらはラボで行われているプログラムです。平日はまた違ったプログラムを行なっております、学校団体がたくさんやって来ます。保育園の団体さんも来ますので、例えば、私が一人で仕組みラボに入っていた時に、1時間に100人以上の子供たちが来て大変だった記憶がありますが、それくらいに学校団体が来ています。そのような子どもたちが急に来ても楽しめるプログラムを考えてやらせていただいております。

自然ラボというところでは観察できるものが多いです。土・日・祝日に実施しているものというのは、今こちらで紹介した根っこの観察やシャカシャカ静電気コップになります。ラボ以外にも科学学習室やイベントホールなどがありますので、そちらで開催するものも色々あります。事前申込みの場合もありますし、当日申し込む場合もあります。開放型とっていつ来ても何かできるというスタンスのものがあります。

ボランティア主催のプログラムもあるということは先に言ったとおりです。オレンジのジャンパーを着ているのが当館のスタッフです。その奥に赤いベストを着ているご年配の方がいますが、この方が実はボランティアさんです。当館にはシニアボランティアが大体100人おります。曜日ごとに大体10数名で構成されて、それぞれ活動されております。これ以外には、ジュニアボランティアという制度があります。小学校5年生から高校3年生のボランティアです。この子たちは今年増えまして、70名になりました。土・日・祝日及び長期休みのときにやって来て活動をしています。こちらが自然ラボです。私がやったときのプログラムですね。鱗について勉強するというラボをやりました。そのときに鮭の標本を使いまして、子どもたちに触ってもらっているところが写っています。私の隣に写っている赤いベストを着た男の子がジュニアボランティアです。彼は3年くらいやっているのですが、中学校1年生です。すばらしいのは、私が解説しているのを隣でじっと聞いていて、全部完全に覚えてしまっているところです。そして、お客様にまったく同じように説明していて私は驚きました。小学生・中学生のお兄ちゃんお姉ちゃんが子ども達に教えてくれるのは、とっても良いと思います。次世代の科学好きな子の育成にも、このようなジュニアボランティアという制度はとても有効だと感じています。

続きまして、地域づくり事業にも関係します子供体験塾という事業を紹介させていただきます。こちらは私がメインで担当させていただいている事業になります。子供体験塾ですが、こちらは「多摩島しょ広域連携活動助成事業」という東京都の助成をいただいている事業になります。連携してやるというのがポイントになっておりまして、5市の行政の方と組合と私どもから成る実行委員会形式でやらせていただいております。

大型の感動体験を与えるというプログラムで、毎年頭をひねって色々なテーマでプログラムを作ってやらせていただいております。圏域在住の小学校1年生から中学校3年生を対象としたプログラムを実施しております。大体、夏、秋、冬の3回のプログラムを通じて体験してもらおうというものを考えているところです。私が関わるようになってからまだ3年目ですが、子供体験塾のこの5年間のテーマは、多摩六都の自然やものづくり、あとは清里に泊まり、天の

川を見てみようというプログラム、「たまろくトレイン探検隊」、「東京 water 調査隊」などをやってきました。このうちで私が関わっておりますプログラムは2つで「たまろくトレイン探検隊」と「東京 water 調査隊」を紹介させていただきます。

「たまろくトレイン探検隊」は2016年に行なったプログラムになります。夏場のプログラムは西武鉄道の協力を得まして、ミステリートレインを走らせていただきました。その列車の中でプログラムを展開し、さらに後半は5つの市に分かれてまちづくりの魅力を探そうというプログラムをやったものです。秋はFM西東京の協力を得まして、地元の駅のラジオCMを作ろうというプログラムをやらせていただきました。それら作ったものの発表会を当館のプラネタリウムのドームを使って発表するというプログラムです。西武鉄道で巡ろうということで、まずは科学館に集合しました。そこから西東京市の東伏見駅に移動しまして、電車に乗ります。西武鉄道の4000系といって飯能から秩父に向かう各駅停車でボックス席のついた白い電車です。列車の中でお昼ご飯を食べ、車両基地の見学をしました。

午後からは、まち歩きをして、科学館に戻り、皆でベスト3を決めて発表する。このような1日のプログラムを4回やりました。こちらが電車の中でやっているプログラムの様子です。皆で自分のまちの良いところをインタビューしているシーンです。各グループが午後にまち歩きをするので、その前にチームワークを調整するというプログラムをやらせてもらいました。西武鉄道さんのアナウンスが入るので、それを避けながらやるため、鉄道会社の方とも協力しながら進めたプログラムになりました。これは西武球場駅で全員で記念撮影したものです。なかなかこのようなことはできないので子どもたちにとっても、とても良い経験になりました。車両基地の中では、車両を洗っているところを見る体験や、スタッフが電車に乗ってくれたのでスタッフの方とお話ができるという特別な体験ができて、とても良かったのではないかと考えております。各グループいろいろな体験をしてきました。これらをやるとき私たちは、まち歩きビンゴというものを開発しまして、それを手に皆で周ってビンゴを作りながらいいところを探するというプログラムを展開しました。そのまちのベストをまとめたものがこちらになります。それぞれが選んだものをまとめて発表してもらおうという形をとりました。

こちらの経験を秋にも繋げて行ったという経緯があります。

秋のプログラムは先ほども申し上げましたとおり、地元の駅のラジオCMを作ろうというプログラムでした。当館に来ていただいた方はわかるかと思いますが、すぐ後ろに田無タワーというのがあります。その下にFM西東京がありまして、

非常に近いので連携をさせていただいたプログラムになっています。皆で原稿を作るのですが、現役のアナウンサーにレクチャーをしていただいて、スタジオで収録を行いました。各グループごとに色々なCMを作りました。ラジオCMで優秀賞を取ったものは1ヶ月間FM西東京さんで流していただきました。併せて特番を組んでいただきまして、優勝したチームがラジオ出演できるということもしていました。地域に繋がったなかなか面白い活動であったと思っております。

続きまして、「東京 water 調査隊」という昨年行ったプログラムを紹介させていただきます。こちらは、荒川の上流から河口までを皆で調査しようというプログラムです。なぜ荒川かというと、多摩北部の圏域は8割を利根川と荒川水系に頼って生活しているということがありまして、それを知って自然環境を調べていこうじゃないかというプログラムでした。夏場は皆で河口に行きました。生き物観察と荒川の河口がどういうところかというのを海から見るというプログラムです。秋は、低学年と高学年で分かれまして、低学年は中流域の私たちの圏域の生き物観察を行いました。高学年は上流域に行きまして、河原の石の観察や川の博物館の見学を行っています。最後には成果発表展示や映像の報告会をしました。台風にも見舞われたので、一部、水上バスに乗れなかったのですが、一番体験させてみたかった干潟の体験というのは台風の次の日でもやらせました。おかげで干潟が空いていて、良い体験ができて良かったねと皆で言っておりました。

秋の低学年のプログラムは中流域の生き物観察会を行いました。東久留米市にあります流水がとても綺麗な落合川で、子供たちが生き物を捕まえるというプログラムをやりました。網を打って鮎を捕まえて、観察するということから始めました。普段川を見ているだけでは生き物がいるのかわからなかったり、いても何かわからなかったりということがあります。それらを実際に間近で見、存在を体験してもらおうというのが趣旨です。また、柳瀬川というところは、かつては汚れていた川で、この少し下に水再生センターがあるところです。川を綺麗にしようという人々の思い、活動の成果がこれだけ川を綺麗にしたというところもありまして、それも伝えていくということをやっています。

こちらは、落合川というとても綺麗な川です。こちらは川塾というのを地元でやっている、通称「あらい」という方なのですが、その方に教えてもらいながら、皆で生き物を獲るという体験をしました。今参加している子供たちは小学校1年生から3年生までです。ですので、最初は少し怖がったりしていたのですが、段々慣れてくると自分たちでどんどん捕っていきました。捕り方もうまくなってきて、皆で一緒に楽しく体験しながら学ぶことができました。

当館には魚類担当のスタッフもいるのですが、やはり地域の方の協力なしにはできないプログラムになっています。そのような方々と繋がりながら一緒に事業をやっていくことは非常に大切だなと感じているところです。今回のプログラムですが、映像担当を外部と組んで一緒にやりましたので、このようにドローンの撮影なども併せてやらせていただきました。

落合川に行った後は、圏域の小平市にあります「ふれあい下水道館」というところに見学に行きました。私たちの使った水がどのようなところに行くのか、下水道の役割を学ぶために行っています。この施設はおそらく日本で唯一、本当に使われている下水管に入ることができる施設です。ですので、私は絶対この体験をしてもらいたいと思いました。

子供たちの様子を見ていただければわかるかと思いますが、本当に臭いので、皆鼻を覆っていました。私も行ったのですが、ツーンとした感じがして、それはそれで良い経験になったのではないかと思います。とても親切なスタッフが下水道の仕組みの解説をしたり、時間に合わせてプログラムを作ってくださいました。

秋のプログラムは二日間に渡って行ったのですが、外のフィールドワークとまとめのワークショップという形で構成しています。こちらは別の日に科学館に集まって行ったプログラムです。最初は当館の常設展示室の地域の自然を紹介するコーナーというのを見てもらいました。そのあとに、皆で夏の体験と秋の体験を可視化するというワークショップをやりました。子どもたちが取り組んでいるのは、夏の体験を可視化する作業です。低学年向けのプログラムとして、夏に自分たちが見つけた干潟の生き物の塗り絵をするというプログラムをやらせていただきました。作ってくれた子どもたちの作品は、荒川発見マップというものを作りまして、冊子という形で表現しています。

この後、高学年も同じマップの上流部分に自分たちが見つけたお気に入りの石を指していくという作業をやりました。これは子どもたちが自分たちは何を見つけてきたのかを表現するプログラムをやりました。こちら、低学年はコラージュといって写真を切り貼りする、絵を描くなど自由にやらしてもらおうという感じになります。高学年は、発見新聞づくりということで新聞を作ってもらいました。子どもたちは自分たちで作ってくれて、それらを後で発表する時間を設けました。できたものは、そのあと展示をしました。さらに優秀賞については、館長から表彰してもらおうという形でやっています。とても短い時間だったのですが、グループごとに皆で話し合いながら自分の好きなものを書くことをしながらまとめました。

秋のプログラムなのですが、こちらは河原の石の観察会を行いました。河原

の石の観察では当館には石専門のスタッフがおりますので、そのスタッフが河原に見られる石すべてを集めて並べてみて、自分の一番好きな石は何かを選んでもらいました。それを展示で紹介するというのもやっています。低学年と高学年ともに、合わせたものをこのように当館の小コーナーを使い展示をさせていただきました。奥にどのようなことをやったのかの紹介、子どもたちの作ってくれた作品の掲示、そして、先ほど紹介しました荒川発見マップを展示させていただきました。このようなことを通じて活動自体の紹介をするというのを併せてやっております。このように体験したことをまとめて発信するということまで含めた授業を毎年展開させていただいております。

続きまして、「博物館とコミュニティ」です。

地域づくりというものに基づいて行っているものです。地域コミュニティの生涯学習の拠点となることを目指しておりますが、内の場だけでやることは考えておりません。例えば昨年私が関わらせていただいたのは、西東京市にある下野谷遺跡というところの秋祭りです。こちらに「しーた」と「のーや」というキャラクターがいるのですが、このキャラクターの生みの親のデザイナーさんに一緒にやりませんかとお声掛けをいただきました。縄文の食モビールづくりというプログラムを開発しました。そこで展示出店させていただいて、子どもたちに縄文人の食べていたものはこんなものだよということを知ってもらいながら、楽しく工作をするというプログラムをやらせていただきました。この他にも、圏域内の市民祭りや児童館などのアウトリーチなどもさせていただいております。

また、協定を締結している研究施設でもアウトリーチを行っております。特徴的なのは、都下コミュニティカフェがあります。こちらは今年の3月にオープンしました。もともと「田無なおきち」というコミュニティカフェをやっていた業者さんに入らせていただきまして、運営しております。食材も地域のものを使って提供しているなど、非常にこだわっておりますし、味も美味しいので、是非皆さんこれを食べに来るだけでも価値があると思いますので、当館にいらっしゃるときはこちらも併せて体験していただければと思います。

来月3月4日にイベントがあります。多摩六都市民感謝デーというものをやります。こちらは毎年やらせていただいているのですが、特徴としては、圏域5市の方は当日入館料が無料というプログラムでやらせていただいております。併せて多摩六都ご当地グルメフェスティバルというのをやらせていただいております。圏域でお店を出されている方にお声がけさせていただいて、ブース出店していただいております。産業振興課の方や商工会議所の方のご協力で行っているプログラムで、今後もこのような形で地域と繋がって活動していきたい

と子どもは考えております。

様々な繋がりを大切にして新たな事業の可能性を広げるということを大切に活動していきたいと思っているところです。

「おわりに」というところですが、ここからは私の話もう一度させてください。多摩六都科学館で、私が取り組むこれからの挑戦について、くじけないように皆様に宣言させていただきたいと思います。

当館では先ほども出てきましたローリングプランというものでいきますと、もう第三期の成熟期に当たると考えており、サービスの在り方を変えていかなければならないと考えています。当館が目指すことを拡大していきますとこちらになります。

一つのキーワードとして、「Social Inclusion」という言葉が見えてくるかと思えます。誰もが楽しみ交流できる場を作りあげる自分の科学館、地域の科学館として市民から愛されること、これを目指していく。では、どのようなことをやっていけばいいのかと考えてみるところです。この「Social Inclusion」、「社会的包摂」の実現に向けて、昨年からは少しずつ動いております。やりたいことはといたしますと、在住外国人向けの英語プログラムです。昨年も実験をやっておりました。ただ、在住というところができなかったのも、今年は圏域にありますこのようなサポートをしている団体と一緒に手を組んでやっていきたいと考えているところです。ただ、英語がいいのか正直迷っています。圏域内に住んでいる在住外国人の半分は中国人です。むしろ、やさしい日本語で展開した方がいいのではないかという意見もいただいているので、併せてどのようなプログラムがいいのかをよく検討していきたいと思っております。

高齢者向けのアウトリーチプログラムも今年度からやっております。こちらは、どこでやったらいいかまったくわかりませんでした。社会福祉協議会のボランティアセンターの知り合いの方に相談したところ、コーディネートしてただけまして、高齢者交流室を小平市でやらせていただいております。また、圏域を広げて色々なところでやっていけたらいいなと考えております。ただやるだけではなく、当館の科学館らしさ、科学の要素を含めたうえでどのようなプログラムを提供して地域に貢献できるか考えていきたいと思っております。

そして、あともう一つは、当館ではあまりできていない未就学児向けプログラムです。できたら、0～3歳を対象としたプログラムをやっていきたいと考えております。今はまだ構想段階なのですが、もし実現しましたら皆さんにもぜひ来ていただいて、色々なアドバイスをもらえたらと思っております。

今、私が博物館でやっていることを紹介させていただきました。これらを、

言葉を置き換えてできることがあるとしたら、皆さんだったら何をどのように挑戦していくのか、そのヒントになったらと思い、お話しをさせていただきました。

皆様、長い時間、私の話しにお付き合いいただき、ありがとうございました。

課題別集会

第1 課題別集会

公民館がまちを創る～公民館が生み出す「地域」～

討議内容

近年、東京の公民館でも、公民館と地域社会とのかかわりが問われるようになり、公民館が地域課題を積極的に学習課題に据え、「持続可能な地域づくり」の方向を市民とともに考える取り組みが進んでいます。

公民館は「学ぶ」場であり、多くの人たちが集まる場です。公民館であるからこそ、地域の課題を集め、その解決策を話し合い、地域の人やグループを繋ぐ橋渡し役や、さまざまな情報の「受信」と「発信」のまとめ役として、世代を超えた連携を築くコーディネーターになることができます。

国分寺市公民館運営審議会が今年度答申した「地域づくりを目指した公民館のあり方」を参考に、公民館がどのように地域づくりを担っていくことができるのかを考えてみたいと思います。

助言者 佐藤一子氏(東京大学名誉教授)

事例報告者 田中英郎氏(国分寺市公民館運営審議会副委員長)

司会 野中哲也氏(国分寺市立恋ヶ窪公民館長)

企画運営 国分寺市公民館職員

1. はじめに

(1) 佐藤一子氏 紹介

(2) 開催要項一部変更

事例報告者富塚一資氏(埼玉県富士見市水谷公民館長)、怪我により欠席のため、国分寺市公運審の管外研修での富士見市公民館見学で学んだことを紹介(佐藤氏)

(参考：レジュメ裏面に「水谷公民館だより」掲載)

2. 地域づくりをめざした公民館のあり方 (東京大学名誉教授：佐藤一子氏)

国分寺市第1期公民館運営審議会に「地域づくりをめざした公民館のあり方」が諮問された時に公民館運営審議会の皆さんと研究討議をしました。多摩地域の市町村公民館の歴史の中で、「新しい公民館像をめざして」(東京都教育庁社会教育部、1974年)の提言が非常に大きな影響をもたらしたのではないかと、特に国分寺市などはこの提言をもとに公民館のあり方を考えてきたという経緯が

あり、国分寺市公民館の50年の歩みを振り返るという作業を市民の皆さんそれぞれが地区の公民館活動を掘り起こすという作業をしてきました。

(1) 農村型公民館から都市型公民館へ

その中で、改めて今日の大きな枠組みでの問題提起となりますが、昭和21年に社会教育課長寺中作雄のもとで出された文部次官通牒「公民館の設置運営」を受けて、公民館が主に農村地帯に普及していき、1970年代に入って都市でも計画的に公民館が設置されるようになりました。昭和20～30年代は全国で最大約35,000館あり、その大半は農村の公民館、実質的には集落の単位にあり、公共の公民館に整備されたものもあれば、その末端に「自治公民館」というかたちで、従来の自治会館と公民館が役割分担をする、あるいは相互に補う体制でつくられた公民館が多かったわけです。その後、公共の整備が進んでいく中で、公民館は少しずつ本館・分館というかたちで条例上の位置づけが明確になって、1970年代には、集落の公民館は民間の公民館ということで条例から外れ、数が減っていく歴史が高度成長期にあり、その代わりベッドタウン化した地方都市に公民館が建設されるようになって、施設

的な充実が成し遂げられながら、全体として20,000館以下に落ち着きました。1970～1980年代は、農村中心の時代から、新しい都市型公民館が設立されてくる時代であり、多摩地域で公民



館を考える時は、この時代の変容をしっかりと捉えることが大事ではないかということ、歴史の区分として共有しました。

都市型公民館は「まちづくりの機能」をもっていたということです。学校建設が一段落したところで、都市計画の中に公共施設建設を位置付けていく中で、もっとも重要視されたものが、公民館・図書館であり、公民館が都市ないしは都市周辺部に普及していく1970～1980年代以降は、都市計画のまちづくりの一環として公民館の役割機能が期待され、施設機能が検討されてきました。都市公民館は、機能が多様で、建物として充実しているということが、今の私たちの財産として残されている、非常に重要なポイントだと思います。

私たちは、さまざまな部屋があり活動ができる公民館を、1970年代から今日に至るまで、まちづくりの一環として維持・発展させてきました。公民館は「まちをつくる公共施設としての“場”」を役割として持ってきたということです。なぜそれが非常に活況のある施設になったのかというと、全体として、地方から流入してくる、いわゆる“新住民”と言われる方が非常に多かったからです。この時代は、地元民(地主)と新住民の交流がほとんどなく、まちがぎすぎすしていたという記憶があります。新住民が流入するまちで、市民がコミュニティを創る、関係性を築いていくことは、町内会や子ども会等必ずしも新住民がどんどん参加できるという空気がなかった中で、新と旧の住民がコミュニティを新たにつくっていく場として公民館が役割を果たしたといえます。空間、環境が整備された、その環境の中で人が集まり、つながり、結びつき、活動を発展させていく、それがソフトな意味でのコミュニティの形成になっていった。こうした点では東京都公民館連絡協議会に加入している各市町村は共通の歴史を辿っていると思います。

講座からサークルへ、たくさんの団体が利用するかたちが生まれてきて、共に運営に関わり協力し、サークルを越えた連携に発展してきたことは、都市型公民館の運営の成果として、サークルの連絡協議会、あるいはそこから公民館運営審議会に参加していくという、個々の「利用者」にとどまるのではなく、ともに公民館の運営に関わったり、一緒に協力して何かをしようという、サークルを越えた活動が生み出されていくのです。旧来の地縁的な組織に依拠したまちづくりということではなく、いわばそういうところに拠り所をもたない新しい市民にとっても、地域で一緒に何かをやっていく、それが子育てを通じて、学校との連携にも発展していくというかたちで、主に女性が担い手となり、大都市周辺部のコミュニティが新たな形で発展してきたということを、1970～1990年代の歴史として振り返ることができると思います。

(2) 「新しい公民館像をめざして」の意義をふりかえる

①「公民館は住民の自由なたまり場です」

②「公民館は住民の集団活動の拠点です」

これは、互いにつながりグループ・サークルを作りましょう、ということです。

③「公民館は住民にとって『私の大学』です」

1970～1980年代は、高校進学率が7～8割、大学進学率はまだ低い時代です。その中で、「私の大学」という言い方には、知識や教養に対する切実な市民の要望が投影され、大学の公開講座や市民講座のようなものが各地域でもたれてい

たということも、この呼びかけの中でひとつのポイントになるかと思えます。

④「公民館は住民による文化創造の広場です」

美術・音楽・俳句・短歌等、いろいろな文化活動を、展示や公民館まつり等で、自分たちが学んだ成果を発表していくことができ、単に受動的に学ぶのではなく、市民自らが創作、創造の喜びを共有していくような、積極的な文化活動も促されてきました。レベルの高いものが“公民館発”でなされていったということで、この時代は公民館が非常にクリエイティブな役割を担っていた、まちをつくりながら市民のつながりと参加を促していったということ、歴史として確認することができると思えます。

(3) 地域づくりをめざした公民館をどのように創り出すか

そうした歴史を共有しながら、現在の地域づくりをめぐるどのような課題があるかを、グループワークでお話したいと思いますが、あちこちで悩みとして言われていることをあげます。

課題① 地域課題というもののハードルが高く、そのようなことをやろうとしてもなかなか住民が集まらない。また、サークル活動には参加するが、連携となると消極的になってしまい、サークルから次のステップにいかない。つまり多摩地域の公民館活動を発展させてきたエネルギーそのものが消極化しているのではないか、市民が利用者にとどまっていた、公民館の運営や事業を創造するところに参加していくことへの働きかけが難しくなっているということです。また、少子高齢化については、首都圏は総合的な人口は減っていないけれども、例えば新宿区戸山ハイツは何年も前に“限界集落”と言われ、65歳以上が過半数に達している。つまり、東京都も恐るべき速度で少子高齢化の方向に向かっているのです。その中で、公民館を利用する人々が、高齢者人口に偏ったり、仕事を辞めた人にとっては縁のない世界なのかあまり関わってくれないというような悩みが出てきています。そういう意味で、利用者の固定化や、子ども若者の状況が大きく変わって塾や学校の勉強、進学中心の生活になっているので、地域の子ども会や公民館の行事に参加する子どもの姿を見かけることが非常に減っています。多くの町で子ども会は消滅し、町内会も加入人口が減っている現状があります。例えば駅前マンションの住民などは町内会には関わらない、そういうライフスタイルが、1970年代の都市化の中でも生まれたはずだけでも、当時はそれをうまく新しい地域づくりに結び付けてきたことが、2000年代に入ってからうまくいかなくなってきました。今まで地域づくりの拠点となってきた公民館に何ができるのか、改めて新しい時代の新しい状況の下で、それが問われています。

課題② 「防災のまちづくり」についてです。阪神淡路大震災・東日本大震災を機に、どの地域も被災地域になる可能性が日本中に広がってきています。その中で、学校と公民館は、生活を守る拠点となっていく。その時に、日常公民館を利用している人々が、いろいろなかたちで自助・共助していく、お互いの助け合いという力を発揮していかなければならないということで、「防災講座」の類(地域課題のジャンルの位置づけ)がかなり各地で広がってきている。これをきっかけに「地域づくり」ということを考える市民が増えていくことは大変大事なことだと思います。また、そうしたまちづくりを起点とする環境問題(洪水・温暖・大寒波など)もあります。例えば、ごみを家まで取りに来てほしい(自分で出すことが困難なため)という要請があって個別サービスをしている自治体もあり、本来は地域で助け合っていかなければならないような問題が、日常、この高齢化の中で出てきています。改めて、都市というのは、相互で助け合う「相互扶助」という日常の関係性が非常に弱く、これが都市部の大きな生活上の弱点であり、命取りになりつつあるということです。農村部は、ずっと前から自治会・社会福祉協議会や公民館を中心に、さまざまな「共助の仕組み」というものを集落単位でつくってきているので、そういう伝統をもたない都市部でいったい何ができるのかということ、改めて考えていかなければなりません。環境課、防災課、地域福祉課、学校等、いろいろな部局とつなぎ合いながら、生活圈(中学校区あるいは小学校区)において互いに顔見知りであったり、助け合ったり、何かあれば相談できるような地域づくりへどう展開していくのか、そのために公民館は何ができるだろうか、という課題があると思います。

課題③ 地域の資源を活用して建物の中だけではなく、フィールドワークをしながら、地域の良さや大事な地域課題を考え、行動していく市民の学びを育てていくことが大切です。子どもたちには“アクティブラーニング(行動的学習)”という言い方がされるようになってきていますが、教養的な知識ではなく、自分たちの足で見つけていく活動、互いにコミュニケーションしながらやっていく活動を子どもたちにつなげていく「多世代の交流」で地域を元気にしていく、子どもたちも発見できる、そういう学びをどうつくっていくのが、改めて非常に重要な柱になっていくと思います。

課題④ 入口のロビーが“出会いの場”と「新しい公民館像をめざして」でも提言していますが、現在は、多くの利用者がサークル利用の目的で部屋を使い、ロビーは通り越してしまいます。しかし、今改めて、目的を持たないでたむろっている“居場所”であるロビー、こういうかたちで設計された公民館が非常に有効に活用されているという動きをよく聞きます。

そのことが、都市型・農村型を複合化したといえる埼玉県富士見市の公民館

の様子からくみ取っていただけるのではないかと思います。

(4)農村型と都市型を複合化した公民館のあり方—富士見市公民館の視察から
①富士見市は人口約11万人で、公民館4館体制で、コミュニティセンターも3館あります。緑豊かな農村部とベッドタウンの市街地とを併せ持っています。荒川に近い南畑という農村地帯の公民館は、地域とのつながりが密着している公民館です。公民館だよりはすべての館が住民参加の編集委員会によって作られています。編集委員の方が「編集後記」を書いています。また、「こんにちにはコーナー」で、市民の方がボランティア経験を語っています。

公民館だよりに「定例サロン」という予定表が出ていますが、これが“たまり場”的なものをたくさんつくっていて、例えば「介護者サロン“つぶやきカフェ”」というものがありますが、介護者あるいは認知症の方を対象とした“カフェ”というものが今全国的に広がっています。それから、「百(もも)の会」は、一人暮らしの方々が集まる場所になっています。また「子ども広場」を基にして、「子ども食堂」も公民館で始めています。調理室を使い、保健師、民生委員も入り一緒に運営しています。こうしたことに取り組む時に、地域や他部局のネットワークをうまく活用しながら、いろいろな人たちの居場所をつくるということが、この定例サロンという企画のなかによく出ていると思います。

それ以外にも「田んぼ体験」や「ヘルシーウォーク」などがあり、一緒に地域を歩きながら地域を発見し、またその発見したことが取材記事になって、編集委員の手で公民館だよりに掲載されるという、市民の方々の日常の暮らしに溶け込む公民館の様子がこの公民館だよりから伺えると思います。

②東京近郊の富士見市も新住民が増加してきていたわけですが、1970年代あたりから「まちづくりを考える市民のつどい」というものを事業化し、趣味サークルだけではなく、いろいろなまちづくりを視野に入れた学びをしていこうということで“部会制度”もこの中につくり、水谷の地域を見て歩くような活動を行っているということがあります。

③国指定の縄文時代の水子貝塚の資料館と「縄文ふれあい広場水子貝塚公園」がありますが、それを地域資源として公民館が活用し、市民の集いやまつり、コンサート、また縄文時代の子どもたちの体験などを、この公園を使いながら行っています。

④公民館の企画運営委員会と町会とが協議して、防災のテーマにも取り組んでいるという話がありました。学校も入れて“まちづくり協議会”というものもつくっているとのことでした。

都市化の時代から、やや高齢化が進む中で、都市生活者の中にじわじわとさまざまな孤立化と困難が進んでいます。そうした住民の暮らしの中に手を伸ばせる公民館のあり方、公民館活動をいかに地域で、皆で、参加型で、新しく発展させていくかが、現代の公民館の考えるべき新たなステージとして問われていると思います。

3. 国分寺市の事例（国分寺市公民館運営審議会副委員長：田中英郎氏）

我々が出した国分寺市公民館運営審議会答申「地域づくりを目指した公民館のあり方」を参考に、事例報告をします。

国分寺市は、東は小金井市、北は小平市、西が立川市、南は国立市と府中市、5市に接しています。中学校区に1館ずつ公民館が設置され、図書館も併設されています。

(1) 国分寺市の公民館

国分寺市には5公民館があり、5館合わせて2,135のグループが公民館で活動しています。公民館利用者数は現在も増加傾向にあり、年間30万人を超えています。

(2) 国分寺市公民館の活動のベース

「新しい公民館像をめざして」と「寺中構想」を下地に活動してきた歴史があります。これが地域とどのようにつながっていたのかを検証するための材料となったのが、「国分寺市公民館50周年資料集(平成28(2016)年)」であり、これに基づき国分寺市公民館50年の歩みを振り返りました。その中で、「地域づくり」の6つのテーマが浮き彫りになりました。

① 環境と共生し、地域文化を継承する公民館

国分寺市は、歴史の町、自然豊かな町、農村がまだ残っている町であり、各館このテーマに関わる講座が多数あります。そしてこのような講座から自主グループができています。

② 地域の課題を共有し、地域をつなぐ公民館

ア. 地域会議

本多公民館(平成14年)、もとまち公民館(平成18年)、並木公民館(平成22年)の3館で実施しています。情報交換・課題共有の場であるということをも理念としている会議ではありますが、地域に何かしていこうということで、例えばもとまち公民館の「ファミリー運動会」は、予算がゼロで、地域会議に参加している団体等のスタッフ100人と親子連れ等の地域の人200人余りが参加してい

ます。予算がなしでこのような活動が続いているのは、地域ぐるみの協力があってこそだと思います。公民館に、地域をつくる要素が出てきている例だと思います。

この3館以外にも、恋ヶ窪公民館には「地域を語るサロン」があり、これが地域会議のようなものをつくろうという土台になりつつあります。また、光公民館は「防災」を主体に、自治会と一緒にまちぐるみで取り組んでおり、これが発展して、他館とは違った地域会議のようなものができ上がるのではないかと期待しています。



イ. 学校との連携

ウ. 町会・自治会との連携

③子どもから高齢者まで異世代が交流し、共に育ちあう公民館

ア. 並木公民館では、農業体験講座の参加者が「子ども農業体験講座」で指導したり、陶芸活動グループが「子ども陶芸教室」では指導者の役割をする等、“学ぶ側”から“教える側”へと学びが循環しています。

イ. 勉強の場としてのロビーの開放や、学習支援事業の実施は、子どもたちを公民館に惹きつける要素になっているかと思います。

ウ. 保育室活動では、終了後にさらに地域の活動を行うなど、その先につながっていく人が多く育っています。活動の場を広げているという流れがあります。

エ. 異世代交流は、異世代が参加して、学校と地域が繋がるための事業が行われています。

オ. 公民館まつりは、普段公民館に来ないような方も惹きつけるような、各館工夫を凝らした特徴のあるまつりに発展しています。

カ. もとまち公民館では、「地域で老後を考える講座」に参加した人たちが自主グループ化し、地域の方々も巻き込んで、市に高齢者施設設立を嘆願しました。その結果、もとまち地区に高齢者複合施設「さわやかプラザもとまち」ができ、その運営を受諾しているのは、その自主グループが設立したNPO法人『あおぞら』です。

④誰でもが参加することができ、互いに助け合う関係性を育む公民館

⑤異なる文化を受け入れ、開かれた交流を進める公民館

⑥平和と人権を尊び、未来への希望を紡ぐ公民館

4. グループ討議（公民館活動をいかに地域で発展させていくか事例をあげて話し合う）

1班・小金井市は、事業に関して企画委員が、企画と実行を行っている。自治会との連携が強い。地域とのかかわりが強いので、問題になっているところが見あたりにくい。



2班・共通の課題として、30～40代の男性が少ないので、どのように利用を広げていくかでは、事業のチラシを駅に貼る・「お父さんのための子育て講座」や防災講座で活躍してもらうなどの意見が出た。

- ・会場の受付方法がシステムの導入によって、グループ間の交流がなくなってきた。東大和市では、年1回グループ講習会を開き、サークルの発表を行って交流を図っている。

3班・公民館は何をやっているのかわからない、メンバーの固定化、リーダーのなり手がいない、高齢化しているなどの課題が出た。

- ・公民館で、待っているだけでなく出かける。他の部署とつながる。アンテナを張ることの大切さが語られた。
- ・時代にあった公民館の役割を見える化していく必要がある。

4班・国分寺市の公民館運営サポート会議は要綱設置である。まちづくりや地域づくりを考える時には、仕組みの根底が必要である。

- ・小平市では、「公民館がまちをつくる」に焦点をあてて、公民館活動を行っている。公民館企画実行委員が事業の企画に関わる。その結果、地域に必要な講座が生まれ、来館者が多くなっている。

5班・国分寺市の地域会議は、公民館がコアになって声をかけることで、地域活動をしている人が横につながっていくところがいい。

- ・利用者を巻き込んでの地域づくりにならない中で、自分たちが何のために活動をしているのかを考えていきたい。



6班・固定化や高齢化、男性の利用の少なさ、新しい利用者の少なさ

などの課題の出し合いと講座開催時期のタイミングの問題などが出された。

- ・公民館でできることとして、JRやスーパーにチラシを置くなどしての情報の伝達や民間団体との協力、若い人の利用の促進、公民館に来館できない人にむけての出張講座などが考えられる。

7班・まちづくりを考える時、行政の上下の壁・利用者の新旧住人の壁・公民館に関心のある人とない人の壁がある。

- ・職員は一般職で異動があり、慣れたところに異動になるためまちづくりの地域の課題を見つけ出すまでにはなかなかならない。
- ・東大和市の例として、助成金をもらった3年間の事業があった。コミュニティづくりの場・地域のブログづくりの場・まちとまちをつなぐ場を目的に3グループが誕生し、お互いに連携を取り合いながら活動を始めた。

5. まとめ（佐藤一子氏）

当たり前と思っているかも知れませんが、職員・市民・役割を持っている人が一堂に会して討議を行う東京都公民館連絡協議会の研究大会のあり方は、長年培ってきた学びの方法であり、これを絶対になくしてはいけません。この形が公民館らしさであり、今までのものを受け継ぎ、次の世代へつなぐ基本スタイルです。カルチャーセンターでは、学習はできるかもしれませんが、先生の話聞いて終わりです。

討議の中で、公民館らしさ・公民館の魅力は何かという問いが出されていましたが、この研究大会が公民館らしさの表れです。

市民の願いを受けとめて、まちをつくる一環として公民館ができてきた時代と今は大きく変わってきています。何がどう変わってきているのか。実践例を手がかりにしながら、どう変わってきているのかを知るグループ討論になったと思います。

国分寺市公民館運営審議会委員になって、国分寺市公民館の50周年の歩みを振り返る中で、多摩地域の公民館が積み上げてきたもののすばらしさを内側からみる経験をさせてもらいました。

グループ討議の中で、社会福祉協議会と独自の連携を取りながら地域の広がりをつくっているところや企画実行委員が多彩な顔ぶれを意識して、企画を考えることによって受講生の幅に広がりが出てきているという話が出ています。また、居場所・サロンというキーワードが出てきました。フリースペースはと

でも大事で子どもが集まってきています。無意識のうちに公民館が若者を取り入れている事例です。また、いかに公民館活動の内容を市民全体に知らしめていくか、情報伝達の方法は、公民館の苦手な部分です。本当に届けたい人に届いているのでしょうか。市報での情報伝達に頼るのではなくラインの活用などで、届けたい人にどう届けるかを考えていく必要があります。30～40代の男性への情報伝達は大きな課題です。

各市とも地域づくりを意識しながら公民館のあり方を問うとか、より広く市民に活用される意義ある公民館とは何かを考えているということが交流できました。公民館にとって苦しいのは、公民館がなくてもいいのではないかと、市長部局が思うことです。利用の効率性・幅広い市民の参加状況・市政にとってどうメリットがあるのかという評価のものさしが厳しくなっています。職員もそうした効率評価を気にして、委縮してきているところも出てきています。

社会教育施設というものを考えた時、図書館や博物館は実数も職員数も増えています。委託も進んでいますけれども。公民館は、他の形態でもよいのではないかとというとらえ方がされがちな施設です。あまり、目的がはっきりしないので、目的を問うことが大事ではないかと考えられがちです。公民館は生活の中で学ぶところなので、目的を限定せずに一人ひとりの市民にとって生きがいというところで、多様な活動に取り組んでいくことが公民館のベースです。何かに特化した目的を据えることは、幅広さを狭めてしまうことになるし、そもそも公民館は一つの目的のためにあるのではないのです。幅広い視野で生活を豊かにするために学びあうという目標をどうとらえていくか、議論が必要です。

岡山県はユネスコで大きな国際的な提言を受けて、環境問題の持続可能な教育というところを全公民館の目標に据えることで公民館のステータスが上がっていることは事実です。広島県は中学校区に公民館があり70館以上あります。財団に委託されています。そこで、広島県の国際平和都市づくりの目標を受けて、全公民館で平和学習を義務としています。どの公民館でも平和の語り部・朗読・絵の展示など、年に1回必ず事業を行っています。公民館のやる気を育てています。どういうものが足元にある課題なのかを掘り下げていく。まちづくりの課題を公民館で意識化しながら取り組んでいく。もちろん生涯学習の場として多様な人々のニーズに応えていくことを考えながらです。

葛飾区は、公民館にあたる社会教育会館から専門性をもつ職員が引き上げられました。公民館にあたるものはありません。しかし、区民カレッジが万人規模で受講生が集まる企画になっています。区長が高く評価し、この講座の大きな柱に人づくりを掲げています。ボランティアがいろいろな形で地域づくりの中で大きな役割を、また区民がお互いをつないで助け合っていく地域社会で、

地域づくりの役割を果たしています。これは、公民館でいうところの「参加」ということです。

講座・事業として大きくクローズアップされることによって、社会教育における学習の意義が注目されます。意識してともに助け合い、共有、豊かさを目指す地域づくりということで、どのような形で市民が参加していくか、参加していけばいいのかを学びから行動へ、行動から学びへということが、地域づくりのキーワードになると思います。

山口県下松市では、図書館員が学校にでむき、すべての子どもたちが図書館を自由に使えるようにと、図書館教育を始めました。すべての市民が生涯にわたって図書館を利用できる力量をつける教育を図書館が責任をもつというものです。ターゲットを小学4年生にしぼり、小学4年生になった時に図書館職員が使い方の指導や図書の検索方法など、一生図書館を使えるという自信や楽しみを教えるという教育を一年かけてやりました。中学生の利用率は高くなっています。

公民館の魅力と公民館を利用すると得をするということを、公民館運営審議会と教育委員会で合議して、公民館をアピールしていくために全市民対象に「公民館の魅力、意義とは」という教育が行われるようにということも重要です。

社会教育法の中にある第5章公民館は、日本の地域づくりの歴史にとって、大きな教育的文化財産なので、それぞれの地域の中に根付かせてきたあゆみを振り返り、共有することによって次の可能性のある創造的な公民館活動につなげていきます。そのために、今日が第一歩になることを祈念して終了します。

司会

地域の中にある公民館。またその公民館が地域をつくるということで今日は考えてきました。実のあるディスカッションができました。

国分寺市公民館運営審議会の答申は、国分寺市役所・公民館の公民館運営審議会のサイトの中にあります。機会があれば、一読していただきたいと思います。



第二課題別集会

「公民館の価値をみつめなおす～住民とともに公民館を『評価』する実践～」

助言者 越村康英氏（千葉大学非常勤講師）

事例報告者 横山史樹氏（松本市教育委員会生涯学習課・中央公民館）

富田和枝氏（国立市公民館運営審議会委員長）

三好紀子氏（国立市公民館運営審議会委員）

井口啓太郎氏（国立市公民館・社会教育主事）

司 会 井口啓太郎氏（国立市公民館・社会教育主事）

企画運営 国立市公民館職員

1. 趣旨・目的

公民館の効率的な施設運営や事業実施、また市民に対する説明責任などが求められる今日、公民館の価値を豊かに表現し、広く共有していく必要があります。同時に公民館の危機が叫ばれる昨今、行政内外に公民館の価値を伝えていくために、社会教育独自の「評価」に関わる取り組みも求められています。学びの主体である市民とともに、公民館事業の意義や課題を社会的に共有し、よりよい公民館をつくっていくにはどうすればよいのでしょうか。

本課題別集会では、公民館活動・事業を市民・職員が協同して研究・検討する二つの事例を通じて、上記の課題について考えることを目的としました。具体的には、前半、長野県松本市、国立市の取り組みをご報告いただきました。後半は助言者の越村先生より、コメントをいただき、参加者によるグループ討議を行いました。報告タイトルと報告者、助言者コメント（講演）のタイトルは、以下の通りです。

2. 事例報告・助言者コメントの概要

*事例報告1 「住民と職員の学びの場～松本市公民館研究集会～」

横山史樹（松本市教育委員会生涯学習課・中央公民館）

*事例報告2 「国立市公民館『公民館活動をふりかえる会』の取り組み」

富田和枝（国立市公民館運営審議会委員長）、三好紀子（国立市公民館運営審議会委員）、井口啓太郎（国立市公民館・社会教育主事）

*助言者コメント「よりよい公民館事業（公民館活動）を創造する『評価』～松本市・国立市からの報告を受けて～」

助言者 越村康英氏（千葉大学非常勤講師）

各報告の詳細については、当日のパワーポイント資料、レジュメ資料を掲載しましたので、それをご覧ください。以下では、後半のグループ討議の記録を紹介します。

3. グループ討議の議論要旨

参加者が6つのグループに分かれ、グループ討議を行いました。論点は以下3点としました。①松本市、国立市の事例発表を聞いて、印象に残った点や大事な観点、②事例発表者への質問や疑問、③助言者への質問や疑問です。

以下は、各グループの討議報告の要旨です。

*グループ1

- ・小平市では、市民参加の事業企画委員会が立ち上がり、これから動き出す予定。
- ・西東京市では、事業評価表があるが、利用しやすい形に精査する必要がある。
- ・高齢化する地域の課題として、福祉センターや文化センターとの差別化をし、公民館の特色を出すことが評価を高めることになるのではないか。
- ・社会教育全体が衰退していく中で、配属される正職員が社会教育主事の資格がなかったり、社会教育そのものに理解がなかったりすることへの危惧がある。

*グループ2

- ・事業評価の評価者は誰が適切か。
- ・評価をする際に、関係者だけではなく範囲を広げて、講師も関わったら良いのではないか。
- ・様々な各市の事業計画等に載っていたりすることで、日常的に非常に種類の多い評価を行っている現状から、評価のための評価になっているのではないか。
- ・小金井市にはNPOによって委託運営されている公民館があるが、現在行われている評価書の中では、委託についての評価がわかりにくいのではないか。

*グループ3

- ・東村山市では、市民ボランティアによる反省会が評価として機能して

いる。また、年1～2回職員より、公民館運営審議会に対して年間事業一覧の報告があり、そこで評価を行っている。

- ・日野市では、公民館運営審議会の中で、時間をかけて講座の事業評価を行っている。
- ・西東京市では、事業企画報告書を作成し、公民館運営審議会においてやりとりを行っている。また、3年前より評価表を作成した。ここでは、一次評価を職員、二次評価を公民館運営審議会で行っているが、その結果が次年度へすぐ反映されないことが課題。評価表を簡素につくり直すか検討している。
- ・国立市で行った「ふりかえる会」は、記録として見える化される必要があるのではないか。
- ・国立市で行った「ふりかえる会」は、市民の参加を直接取り入れた点が参考になった。
- ・地域や学校区ごとの包括支援センターのような教育や福祉等と一緒にあった施設での地域づくりがこれから検討できるのではないか。

* グループ 4

- ・「評価」という言葉自体がふさわしくないのではないか。
- ・松本市の「研究集会」や国立市の「ふりかえる会」では、多くの市民が評価に参加していて透明性があるのが良かった。
- ・公民館に若者をどう取り込んでいくか、高齢者が中心になっている現状をどうするか、職員の減少による体制の弱体化等、評価以外にも課題は多い。

* グループ 5

- ・事業単位で評価している。
- ・環境の激変により、どこに向かって評価するのか（ビジョン）を検討することが求められるのではないか。
- ・松本市の「研究集会」では、職員と市民が一体になっている風土が100年単位で続いている。東京ではまねできない事例である。
- ・国立市の「ふりかえる会」のように、市民と職員が一体になって話し合う場づくりが必要なのではないか。

* グループ 6

- ・小金井市、国分寺市、福生市では事業報告書を作成し、参加者アンケート

- ートや参加者数等の数字は記録されている。
- ・福生市では、講座の根拠がどこにあるのかという指標を作成し、それに基づき次年度の事業へ反映させていく。
 - ・小金井市では、市からの代表者により実行委員会を組織し、講座の企画や評価を行っている。C評価をすると、次年度に反映されなくなるため、評価のつけ方難しい。
 - ・講座の評価は数字だけでは推し量れない。

4. 質疑応答

グループより2点質問が出されました。

- Q. 財政難の現状で、公民館独自評価で良い評価の講座も、対抗軸の行政評価では評価されにくいこともある。学びや教育といった公民館の根本的な本質と評価がどうつながるのか。
- A. (助言者 越村より) 行政評価だけでは、お金を理由に事業が切られていき、対抗ができない。そのため、社会教育や公民館の視点から、事業への意味や成果があったかを、数字だけではなくストーリーやエピソード（こんな活動が生まれた、講座に参加し人生観が変わった等）を集め、示していく、見える化していく努力は必要である。国立市の「ふりかえる会」のような場に、行政管理者、財政に関わる職員、首長などを呼び、生の市民の声で、公民館の意味や内容を伝えることは、財政難という面に対抗する有効な手段といえる。
- Q. 松本市の「研究集会」について、集会のマンネリ化や実行委員の固定化といった課題は、解決されたのか、どう変化しつつあるのか。
- A. (事例発表者 松本市 横山より) 市民実行委員の固定化やマンネリ化を打開するために、「研究集会」に今まで接点のなかった、公民館が見ていなかったところで活動している人々を掘り起こしていき、つなげていくことを意識して行っている。分科会では、信州大学の学生を呼び、どうやって地域を動かしていくかを考えるなど、若い人を入れる工夫をするなど、メンバーの変化をつけている。

5. まとめ

助言者、事例報告者より以下2点の観点からまとめがなされました。

* 公民館について (事例報告者より)

- ・ 公民館は何かパッと完成形が見える場ではありません。とにかくつくり

続け、市民が集まり続け、交流し続け、意見を交換し続ける。そこから自分たちの町づくりを地道にやるしかないのだと思っています。また、ビジョン（計画）を持つのが先だろうというお話や、記録化しなければだめでしょうという議論など、とても示唆に富む話をお聞きできました。できるかどうかわかりませんが、これからみんなで検討したいと思います。ありがとうございました。（事例報告者 国立市）

- ・松本市の「地域づくり実行計画」によると、公民館は学習権を生かし、住民の主体性をつくっていく機関として機能する必要があるとされています。主体性をつくる機能を生かす意味で、住民主体で地域づくりをやっていく場として公民館が位置づけられています。そこが一番のポイントになっていると感じています。（事例報告者 松本市）

*公民館の評価について（助言者より）

- ・公民館の事業をどういうビジョンで、どういう方向に向かって取り組んでいくのかが、評価の前提として大事になってきます。福生市公民館の三角錐モデルのように、公民館として何を目指すのかという視点（＝ビジョン）から、各事業の位置づけを明確にし、事業を行い、評価表により評価を行う方法があります。また一方で、公民館事業は、想定や枠組みを超えて色々な反応（地域活動や成果）が起こる面白さもあります。そのため、ビジョンに基づいた評価だけではなく、職員と参加者とが共に学びのプロセスを振り返るような評価方法も必要です。
- ・法律に照らし合わせると、公民館における評価は自己評価が基本になっています。公民館における「自己」とは、公民館活動の主役・主体である地域の住民、その学びを応援する公民館職員、その住民の代表で、職員と住民をつなぐパイプ役の公民館運営審議会の3者ではないでしょうか。そのため、この3者が、公民館の事業についてきちんと議論し、学び合ったり、高め合ったりできる場をつくっていくことが、評価をする上で重要な意味があると思っています。
- ・第二課題別集会でテーマに掲げた公民館の「評価」に関わる取り組みは、まだまだ議論される必要のあるものです。事例報告の松本市では、長い歴史があり、市民と共に「研究集会」という場で、「評価」にもつながる活動が行われています。一方、国立市では、評価という文脈から、市民と共に公民館事業についてふりかえり、話し合う試みを始めたばかりです。今回のグループ討議でも、多摩のいくつかの自治体で、様々な評価の取り組みが行われていることが共有されました。今後もこのように東

京都公民館連絡協議会研究大会の場で、各地の実践を持ち寄り、相互に学びながら、公民館におけるよりよい評価の形を探っていければと思います。

住民と職員の学びの場 ～松本市公民館研究集会～

長野県松本市教育委員会
生涯学習課・中央公民館



松本市の
マスコットキャラクター
アキマツちゃん
横山 史樹

1月1日現在

人口	240,342人
世帯数	104,483世帯
面積	978.47㎢
高齢化	27.34%
産業	商業、電気・機械、食料品等
交通	新幹線・上り交通、長野自動車道、 高瀬川沿道（中央東線・中央西線）、 大井川、松本電気自動車線



松本市の将来の都市像「健康寿命延伸都市・松本」

「健康寿命延伸都市・松本」とは豊から質へと転換を期し、市民一人ひとりの「命」と「暮らし」を大切に考え、暮らしやすい社会を目指す都市像とする。成熟型社会の都市モデルです。
本すす目指す都市像が人口減少人口減少社会を乗り超えていくため、10年、20年先を具象化した持続可能なまちづくりを推進します。
住民自治、地域の教育力、地域連携といった「地域力」の向上が、「健康寿命延伸都市・松本」の土台をつくります。

美しく生きる。 健康寿命延伸都市・松本



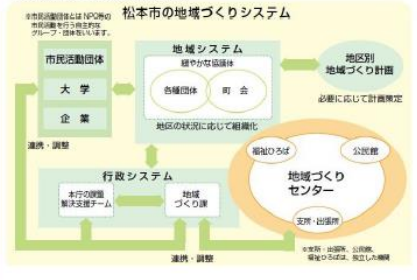
6つの健康づくり



地域づくりは「健康寿命延伸都市・松本」の土台づくり

松本市の地域づくりシステム

住民が主体となって課題解決に取り組む地域システムと、各地域の地域づくりセンターが核となり、本市の各部署が連携を図りながら地区を支援する行政システムとが、市民団体や大学等と連携し、協働により地域課題の解決に取り組みます。



松本市公民館の概要

長野県の公民館

- 日本で最初の公民館
→1946年10月、長野県の「妻籠公民館（現在の南木曾町）」が最初の公民館
- 公民館設置数「全国1位」
→1,236館（条例設置）で、2位の山形県（524館）の約2.4倍（123文科省調査）
・町村（新市制）の青年団、婦人会の学習活動
・松本市公舎堂の建設
・松本自由大学の開催 など

一公民館を容易に受け入れる根付かせる土壌

→「はじめに住民の学習ありき」の精神

松本市公民館の概要

松本市の公民館

- 市設置の公民館 36館（35地区＋中央公民館）
(1) 35地区（行政区画・自治区域）すべてに設置
⇒ 身近な地区に配置、各地区的独自性を生かした活動を展開
(2) 地区の基本は、旧町村または小学校区程度のエリア
⇒ 地域性・文化・生活等を共有しやすい範囲
- 所管・位置付
(1) 教育委員会が所管する教育機関（学習の自由を保障）
(2) 独自性・専門性を生かした独立機関（住民側から地域を創る）
- 専任職員
(1) 館長（非常勤特別職／地区推薦）
(2) 主事（市の正規職員）
- 活動
地区全体の事業、各種講座、各種団体活動支援、地域づくりセンター事業等

松本市公民館の概要

松本市の公民館

5 職員研修

- (1) 公民館長会(月1回)
- (2) 公民館主事研修会(月2回)

★公民館主事研修会(月2回)

- (1) 位置づけ
教育長名により招集される正式な職員研修
(勤務時間内に職務として取り組むことができる研修)
- (2) 自主的な企画・運営
公民館主事で組織する「主事会」で企画・運営
- (3) 実践から学ぶ
地域に根ざした住民主体の学習実践活動から学ぶ



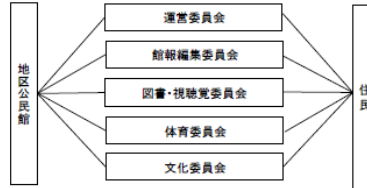
公民館の理念と「経験知」の共有

7

松本市公民館の概要

6 公民館委員会

- (1) 公民館事業運営等への住民参画を保障する制度
(各地区公民館に設置)
- (2) 地域への関心や自治意識を育み、地域作りの主体を形成する



8

松本市公民館の概要

7 町会が設置・運営する町内公民館

- (1) 市条例で位置付けられていない自治公民館 488館
※住民の経費で、住民の役員により運営
- (2) 住民にとって最も身近な公民館
- (3) 住民自治と地域連帯の基盤を構築
■親睦から福祉まで
■住民活動の原点
- (4) 町会組織の一部として町会と「車の両輪」の役割
- (5) 地区単位で町内公民館長会を設置
- (6) 全市で松本市町内公民館長会を組織
■情報交換、各種研修の実施
■「町内公民館活動のてびき」発刊 等

9

松本市公民館の概要

松本市公民館の理念

- ① 身近な地域で
- ② 「住民主体、行政は支援」にこだわり
- ③ 子育て、健康、環境、人権、福祉まで幅広い地域課題を
- ④ 住民と職員の協働により
- ⑤ 地域づくりに向けた学習と実践をめざす

10

松本市公民館の概要

松本市公民館の活動ポイント(自治的・創造的)

- ① 個人から地域へ
→個人の悩みや思い、疑問等を公民館を通して共有する
- ② 「地域・暮らし・学習・実践」が基盤
→身近な暮らしについて、住民同士で共有・学習し、自治力を高め、実践を通じて住みよい地域づくりに繋げる
- ③ 主人公は住民(=住民主体)
→「公民館活動=住民活動」学習を通じた人づくりを行う
- ④ 公民館は独立・中立性
→自由な学習活動(誰でも・何でも)を保障する住民主体で地域を創る
- ⑤ 「つどう・まなぶ・むすぶ」がキーワード
→つどう 地域と暮らしをテーマに人が集う
→まなぶ 対話や座学、フィールドワークなど様々な学習
→むすぶ 人の活動、思い、課題などが繋がる=公民館は交差点

11

松本市公民館の概要

はじめに住民の学習ありき
身近な地域からの視点と発想

- (1) 身近な地域で、これまで培われてきた住民自治を基盤とし、住民自らの気づきと学びから、課題解決への方向性を見出していく。
- (2) 地域住民と行政を含め、地域の暮らしという身近な視点から、多様な主体が連携・協働して進めていく。

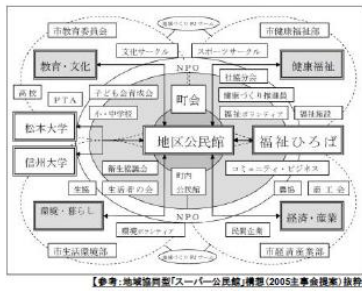


自治と協働を基盤とした松本の地域づくり

12

松本市公民館の概要

【地域の課題を解決する地域プロジェクトチーム】



【参考：地域協働型「スーパー公民館」構築(2005主要会議案)抜粋】

13

松本市公民館研究集会とは

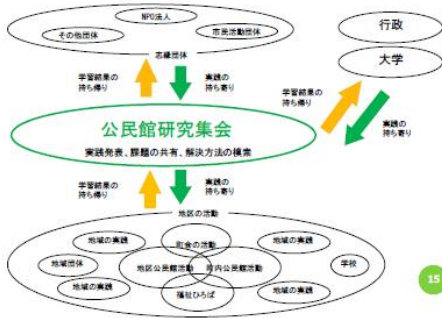
市内各地域で展開されている住民の学習実践活動を共通のテーブルに持ち寄り、討論・交流を深めることで、情報交換や課題の共有化を図る場

→そこで学んだことを再び地域に持ち帰り、今後の実践につなげていくための集い

- 1 その場限りのイベント的な集いではなく、普段各地区で取り組まれている公民館活動の一環として開催する集い
- 2 地縁的な活動と志縁的な活動が出会い、これからの活動に新たな可能性を生み出す場
- 3 地域を取り巻く現状や課題を見据え、住民と職員と一緒に学び合い、新たな気づきや学びを地域に持ち帰り、実践に活かす場

14

イメージ図



15

全体会



16

市民活動商店街



17

分科会



18

集会を成功させるために

- 職員だけの研修ではない
→市民と職員が学び合いながら、共に作る集会
- 地域の実践や人の掘り起し
→職員がどのくらい地域を把握しているか
- 集会当日の分科会を形にすることが目的ではない
→市民と職員が、作る過程で議論を深め、学び合うことができるか
- 幅広い市民活動、地域活動の交流・学習の場
→共通する課題や、地域での位置づけを再確認



公民館の学習機能を大切に

19

現在の課題

- 集会のマンネリ化
→公民館研究集会の趣旨と目的の共有
→普段の公民館活動を見つめ直す
- 分科会が切り口のテーマの話で終了
→分科会の形を作ることが目的になっている
→市民と職員が、作る過程で議論を深め学び合うことが大切
→人と人が出会い、新たな可能性が生まれる場
- 市民実行委員の固定化、義務化
→地域の新たな実践や人の掘り起しが難しい
→職員が公民館活動だけではなく、幅広く地域を捉えること

20

今年度の集会のあり方

未来を拓く自治と協働のまちづくりを
目指す研究集会松本大会(H28)

長野県飯田市と兵庫県尼崎市で開催、松本市で3回目

【趣旨】

「私たち（公民館、住民、NPO、行政等）は何ができるか」「そのために必要なもの（公民館のようなもの）とは何か」を考える集会

⇒狭い意味での公民館や社会教育という範囲にとどまらない実践報告や意見交換が行われ、公民館が基盤となった地域づくりシステムを確立した松本市の公民館を、全国の状況と照らし合わせながら、改めて見つめ直す機会となった。

21

今年度の集会のあり方

- 日本の公民館はこの20年のなかで停滞・後退、公民館数や主事の減少が見られる。しかし日本の公民館制度の様相を活かし、そのウイングを広げているという点で、松本の公民館は典型的。
- 「公民館的なもの」には、公民館というものは何かというものを曖昧にする側面をもっているが、松本の歴史はそれに一つの答えを出している。
教育機関としての公民館が、福祉と結びなければだめということがわかり、福祉関係者とネットワークを構築する（福祉ひろば）。そして本来の公民館とは何かというものの存在を曖昧にせず、一般行政、福祉行政と福祉活動との組み合わせを行ってきた。

未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す研究集会松本大会 基となる会
東京学芸大学名誉教授 小松文人民の情より



松本市公民館研究集会和地域づくり市民活動
研究集会を一体的に開催する研究集会へ

22

職員として幸運に学んだこと

- 課題解決のため、実践している市民がいることを知った
→地区での講座に繋がった
- 他地区や、全市的な課題を知った
→普段中々気付かない課題が見つかった
→外から地域を俯瞰することができた
- 公民館の役割、職員のあり方などを市民実行委員から教わった
→現在の仕事でも助けられている
- 専門知識を持つ大学教授や、企業、NPO法人などの職員と知り合うことができた
→幅広い知識を身に付けることができた
→公民館や社会教育の専門知識を学ぶことができた

23

終わりに・・・



ご清聴
ありがとうございました。

24

未来へつなぐ 私たちのまちづくりの集い ～第33回公民館研究集会 地域づくり市民活動研究集会～

開 催 要 項

1 趣 旨

超少子高齢型人口減少社会の進展により、地域での独居高齢者や子どもの貧困など、地域は今、様々な問題を抱えています。一方で課題解決の担い手の核である地域は、人間関係の希薄化や担い手不足などが進んでいます。

このような中で、安心・安全に暮らし続けるためには、「私たちの地域は私たちでつくる」という住民自治力と、住民、市民活動団体、行政職員等様々な立場の人々が目的を共有し、連携しながら、主体的に「自分たちにできること」を実践しようとする協働の理念が不可欠です。

松本市では、これまで公民館が核となり、地域住民を中心に、行政、市民活動団体、大学等の多様な主体がともに学び合い、悩みながら実践して行くことを大切にしてきた歴史があり、現在の地域づくりの動きに発展しています。

そこで、「学び」を大切にする松本市の公民館の理念を柱に、住民、市民活動団体、行政職員等の様々な主体が一堂に会し、身近な課題への理解を深め、幅広い議論を通して、気づき、学び合いながら、自分にできることを発見し、実践することを生み出す場として、本集会を開催するものです。

2 経 過

昭和60年に職員が主導で始まった「公民館研究集会」は、平成4年より市民が参加し、住民と公民館職員と一緒に学び合い、新たな気づきを地域に持ち帰ると共に、時代に即した新たな公民館の役割とあり方を問い直してきました。

現在の地域課題に対しても、地域の状況に即した柔軟な課題学習や各種団体との連携を図るなど、時代に即した新たな役割とあり方が求められています。

平成29年1月には、「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す研究集会松本大会」を開催し、公民館研究集会として築き上げてきた、住民と職員がともに作り上げ、市民活動と地域が出会う場である特徴を生かし、公民館の新たな可能性を広げると共に、参加者が主体的に「自分たちに何ができるか」を考える機会となりました。

そこで、この大会を継承すると共に、「公民館研究集会」と「地域づくり市民活動研究集会」を一体的に開催し、より広い地域課題を住民・市民活動団体・行政職員等、様々な立場の人が学び合い、多くの気づきを得て、自らの実践に繋げることを目的として、本集会を開催する運びとなりました。

3 テーマ 学びを生かした住民自治力で地域の未来を創ろう

4 期 日 平成 30 年 2 月 18 日 (日)

5 会 場 松本市中央公民館 (Mウイング)
(松本市中央 1-18-1 TEL32-1132/Fax37-1153)

6 主 催 松本市・松本市教育委員会・松本市地域づくり研究連絡会

7 主 管 未来へつなぐ 私たちのまちづくりの集い実行委員会

8 日 程(予定)

9:00	9:30	10:00	11:30	13:30	16:30
受付	開会式 感謝状 贈呈式	対 談	昼 食 市民活動 商店街	分 科 会	

9 開催内容

(1) 感謝状贈呈式

集会開会式典のなかで、長年公民館活動にご尽力いただいた方へ、公民館活動推進功労感謝状を贈呈します。

(2) 対 談

□対談：松本大学教授 白戸 洋 氏
東京大学教授 牧野 篤 氏

■内容：住民自治を生かした地域づくりについての対談

(3) 分科会

①地域活動の担い手不足／②地域での子育て／③子どもの人権／④高齢社会を支える地域の力／⑤住民自治に向かって／⑥文化財と環境／⑦安全安心な町づくり／⑧学生と公民館の協働

地域の活動実践事例などを話し合いのきっかけとして、より身近な暮らしの視点から意見を交わし、問題やキーワードについて掘り下げます。

参加者同士の幅広い議論から見えてくる地域が一体となった住民主体の地域づくりに向けて、私たち(住民、NPO、行政等)に出来ることは何かを考え、実践に繋げる場とします。

(4) 市民活動商店街

地区公民館や町内公民館、市民活動団体等が、日頃の学習実践活動について自由に

情報発信(パネル展示・資料頒布等)や情報交換を行い、気軽に語り合える場とします。

10 参加申込について

2月9日(金)までに、必要事項(氏名/住所/電話番号/参加を希望する分科会番号/保育の有無)を最寄りの地区公民館、または集会事務局(中央公民館)へお申込みください。

【集会事務局】

松本市中央公民館 (Mウイング)
〒390-0811 松本市中央1丁目18番1号
電話 0263-32-1132/FAX 0263-37-1153

11 集会のふり返りについて

各分科会で最後に20分程度、集会で学んだことや地域で自分が出来ること等を振り返る時間を設けます。

12 その他

- (1) 市営中央駐車場(Mウイング北棟)は有料となります。公共交通機関等での参加にご協力ください。
- (2) 手話通訳・要約筆記通訳が必要な方は事前にご相談ください。
- (3) 託児保育室(無料)を設けます。希望者は参加申込の際、併せてお申し込みください。

国立市公民館 「公民館活動をふりかえる会」 の取り組み

東京都公民館研究大会 第二種特別委員会「公民館の価値をみつめなおす
～住民とともに公民館を『評価』する実践～」事例報告（2018年2月3日）

国立市公民館運営審議会 高田和枝（委員長）・三好紀子ほか
国立市公民館・社会教育主事 井口悠太郎

国立市と 国立市公民館 について

- ✓ 東京都のほぼ中心に位置する。面積は8,15km²で、全国の市では4番目、市内の市では、横浜市に次いで2番目に小さい。人口は現在約7万5千人。
- ✓ 市内北部の学園都市エリアは1950年代前半の住民運動により文教地区に指定。続く通勤で公民館も開設。業態を豊化したまなづくの歴史がある。
- ✓ 公民館は市内のやや北部に位置する一館のみ。様々な学級・講座を展開する集約型の都市公民館。
- ✓ 公運審委員15名、定例会毎月開催、活発に活動。



みんなで話そう公民館講座 —市民と職員で「学び」を ふりかえる会— とは

- ▶ 今年1月7日に公民館にて、今後の公民館活動をよりよくすることを目的に開催した初めての試み。
- ▶ この会の企画・運営の中心は公民館運営審議会。
- ▶ 4つの主催講座を担当職員がふりかえて発表。
- ▶ 主催講座の成果や課題について、45名の市民と職員がともにふり返り、話し合った。

1 公運審での協議と実施・運営の経緯 —①前期の公運審答申

- ▶ 2016年10月 第30期公運審（2014年11月～2016年10月）が、答申「国立市公民館の事業評価のあり方について」提出
※別紙「くにたち公民館だより」2017年1月5日号(1)参照
- ▶ 本答申における公民館の事業評価に向けた取り組みの提案
 - 1 公民館活動をふりかえる会—公民館研究会の取り組み—
 - 2 公民館アニュアルレポート—年次報告書作成の取り組み—

1 公運審での協議と実施・運営の経緯 —②今期の公運審の議論

- ▶ 2017年4月より、第31期公運審（2016年11月～）定例会で、30期答申の読み合わせと意見交換 ※以下はその主な意見
- ▶ 現状の事務事業評価（いわゆる行政評価）における指標では、社会教育機関である公民館の役割が十分に評価できない。
- ▶ 現状、職員にとって事業実施後のふりかえりのための十分な時間が確保できないという課題がある。ゆえに、事業実施後のふりかえりのための時間を確保する目的で取り組むのがよい。基本的には職員がふりかえるのだが、市民とともに行う「参加型評価」がよい。

1 公運審での協議と実施・運営の経緯 —③今期の公運審の議論

- ▶ 公民館の役割を十分に表現する（発信する）目的で取り組むのがよい。
- ▶ 「教育」に短期間での評価はなじまない。などの意見あり
- ▶ 2017年7月 館長より、第30期答申で示された提案の一つ、「公民館活動をふりかえる会—公民館研究会の取り組み—」の具体化に向けた協議と実施・運営を公運審にお願いする、との提案がなされる。

1 公運審での協議と実施・運営の経緯 —④企画・準備の経過

- ▶ 7月 世話人会（4名・定例会に企画提案する役割）発足
- ▶ 8月 「ブレふりかえる会」（1事例で職員・公運審委員がトライアル）開催
- ▶ 職員に講座事例「認知症とともに生きる」のふりかえりを発表してもらい、そのあと市民（トライアルでは公運審委員）と共に話し合う。
- ▶ 9月 トライアルをもとに、世話人会が進め方を提案
- ▶ 10月 定例会で議論

1 公運審での協議と実施・運営の経緯 —⑤企画・準備の経過

- ▶ 11月 世話人会より、タイトル・位置づけ・目的等を提案、定例会で確認
- ▶ タイトル＝「みんなで話そう公民館講座—市民と職員で「学び」をふりかえる会—」
- ▶ 位置づけ＝現状として職員が市民と一緒に講座をふりかえる時間がないので設定した。「評価」という言葉は使わず「ふりかえる会」という言葉を使う
- ▶ “目的”（後述）
- ▶ 職員よりを提案の、ふりかえる4事例を確認

1 公運審での協議と実施・運営の経緯 —⑥企画・準備の経過

- ▶ 12月 世話人会と担当職員で打ち合わせ（4事例）
定例会に“ふりかえる基本的な観点”（後述）を提案・確認
“ふりかえる基本的な観点”を満たしているか、参加者に伝わりやすいか 等を検討
- ▶ 1月7日 開催
- ▶ 1月9日 定例会で感想出し合う。
- ▶ 1月23日 世話人会で今度のまとめ方など検討

2 「ふりかえる会」企画のねらい —①「評価」と「ふりかえる会」の関係

- ▶ 職員が市民と一緒に主催事業をふりかえる
- ▶ より良い事業企画・運営のために参加者が一堂に会して「研究をする」試行の場である
- ▶ 「評価」ということばがもつイメージを超える 試みが「ふりかえる会」
事業の価値や課題をことばにして共有する。

2 「ふりかえる会」企画のねらい —②会の目的を定める

1. 公民館事業をより良くするため、職員が市民と共に事業をふりかえる機会をもち、成果や課題を明らかにする
2. 市民が多角的な視点を得て、学びの意味をとらえなおす
3. 公民館の社会教育機関としての役割を共有する

2 「ふりかえる会」企画のねらい —③事業をふりかえる観点を定める

- ① 公民館事業全体の中の位置づけ
- ② なぜ、この講座を行ったのか？（目的・経緯）
- ③ どんな講座だったのか？（内容・展開）
- ④ どんな成果や学びにつなげられたか？
- ⑤ 今後の課題や大切にしたいこと
- ⑥ みなさんとふりかえって考えたいこと（課題）

3 「ふりかえる会」当日の様子

- ▶ 「ふりかえる会」当日の概要、流れ
※別紙チラシ参照
- ▶ 職員はどんな「ふりかえり」と発表を行ったか
※別紙「認知症とともに生きる
-認知症映画会の取り組み-」発表資料参照



担当講座を発表する職員

参加者は45名（公運審+職員含む）

4つに分けたグループは、各10名超えるメンバーで議論しました



4 「ふりかえる会」の成果・課題

①参加者アンケートから

- ▶ 職員の方が思い入れを持ち各講座を企画し、市民のさまざまな運営団体が参加協力して開催されていることを改めて感じました。
- ▶ 「公民館だより」紙面上でしか講座の感想や思い（企画意図）が知ることができませんでしたが、今回の企画により、企画者・参加者（不参加者）の声も聞くことができました。感想に載るのは良いものになりがちですが、課題、反省も含んだ生の声を聞くことが出来た点が有意義でした。

4 「ふりかえる会」の成果・課題

②参加者アンケートから

- ▶ 講座はやりっぱなしになりがちであるが、こうした振り返りを行うことにより、次の講座を充実させることが可能となる。
- ▶ 公民館職員の方のお話を聞く機会が少ないし、多くの活動をしてらっしゃる方のお話を聞く機会もほぼないので、生の声がきけてとても貴重な時間だった。

4 「ふりかえる会」の成果・課題

③職員の立場から

- ▶ 経験の浅い職員にとって、公運審委員や市民、当事者と一同に会する機会は貴重。
- ▶ 公民館事業をより良くする建設的な声が聴けた。
- ▶ 職員のふりかえりは大事だが、発表準備が大変。
- ▶ 実際に参加していない市民から、事業の枠組みや企画そのものに対する意見が出された。
- ▶ 市民の「学び」を丁寧に聴き取り、学びの当事者に視点をあてた議論が弱かったのではないかと。

よりよい公民館事業（公民館活動）を創造する「評価」
― 松本市・国立市からの報告を受けて ―

越 村 康 英（千葉大学・日本体育大学等 非常勤講師）

§1. 公民館評価をめぐる政策的背景

(1) 行政機関の行う政策の評価に関する法律〔2002年施行〕

→ 多くの自治体で行政評価（事務事業評価）が導入され、公民館事業もその対象に…

(2) 公民館の設置及び運営に関する基準〔2003年全面改訂〕

→ 「第10条」新設。公民館事業の自己点検・評価を努力義務として規定。

【第10条（事業の自己評価等）】

公民館は、事業の水準の向上を図り、当該公民館の目的を達成するため、各年度の事業の状況について、公民館運営審議会等の協力を得つつ、自ら点検及び評価を行い、その結果を地域住民に対して公表するよう努めるものとする。

(3) 地方教育行政の組織及び運営に関する法律〔2007年改正〕

- 第27条（教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価等）新設
- 教育委員会の所掌事務についての評価（学識経験者の知見を活かした評価）を義務化
- 「公民館の設置及び管理に関すること」（社会教育法第5条）は、教育委員会の所掌事務であり、地教法に基づく評価対象

(4) 社会教育法〔2008年改正〕

→ 公民館評価に法的根拠を付与し、努力義務として規定。

【第32条（運営の状況に関する評価等）】

公民館は、当該公民館の運営の状況について評価を行うとともに、その結果に基づき公民館の運営の改善を図るため必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

【第32条の2（運営の状況に関する情報の提供）】

公民館は、当該公民館の事業に関する地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該公民館の運営の状況に関する情報を積極的に提供するよう努めなければならない。

(5) 第2期教育振興基本計画〔2013年策定〕

→ 基本施策30「社会教育推進体制の強化」において、「全ての社会教育施設で自己評価・情報公開が行われるよう促すなど社会教育施設の運営の質の向上を図る」ことを明記



各地で公民館評価が実施されるように…

§2. 公民館評価を在り方みつめなおす — 3つの視点

① 行政評価で公民館事業は充実するのか!?

- ▶ 行政評価の目的は、政策・施策・事務事業の「有効性」「効率性」「必要性」等を判定し、コスト削減・行政スリム化を図ること!!

【例】某自治体で用いられている行政評価の指標（一部抜粋）

- 市がこの事務事業を行う根拠及び理由は何か（「公」の関与が必要な理由）
- 類似・関連の事業は他にあるか（市・県・国・民間・各種団体等を含む）
- 近隣市では同様の事業を実施しているか
- 成果を維持してコストを削減できるか（事業費や人権費の削減の工夫）
- 今より効果的な事業方式はないか（委託・補助・住民協働等）
- 受益と負担のバランスは適当か

- ▶ 公民館事業の充実を図るという点では「機能しない評価」!? 「逆機能する評価」!?
- ▶ 「公民館独自の評価」を構築することが必要
 - ↳ 行政評価の対抗軸となる評価／行政評価と並立するフォーマルな位置づけをもった評価

② 「数値化可能な評価指標」ばかりを重視していないか!?

- ▶ 公民館の「利用者数」「施設利用率」、事業（講座等）の「実施数」「参加者数（定員充足率）」「満足度」等も重要な結果の一部であり、数値化可能な評価指標を軽視することはできない。
- ▶ 一方、数値化可能な評価指標だけで、公民館事業の成果・課題を把握することは不可能。また、数値の向上が強く目的化されることで、数値に反映されない事柄（取り組み）は巧みに回避され、公民館の設置目的を度外視した「人気ある事業づくり」に奔走することになりかねない!
- ▶ 公民館評価においては、定量的（数的）評価に留まらず、定性的（質的）評価を適切に位置づけることも重要
 - ↳ 事業（学習プロセス）を、「住民（参加者）」と「公民館職員」が共同でふりかえること
 - ↳ ふりかえりの中で出された“発言”を正確に記録化すること
 - ↳ 事業の成果・課題を浮き彫りにする「具体的なエピソード」を“文章”で表現すること

③ 「評価すること」（「評価表」作成）を目的化していないか!?

- ▶ 公民館職員の多忙化とも相まって、「評価表」を作成すること自体が目的化され、その努力・労力が、よりよい公民館事業・公民館活動を創造することと効果的に結び付いていないのではないか!?
 - ↳ 公民館活動（公民館事業）の主体である「住民」が置き去りにされていないか!?
- ▶ 公民館評価の本来の目的とは何か!
 - ↳ よりよい公民館事業（公民館活動）を創造すること!!
- ▶ 「評価表」の作成を否定するものではないが…
 - ↳ 「評価表」（評価指標）を構想するまでのプロセスこそが重要
 - ↳ 作成した「評価表」を活かすという視点

§3. 「松本市」「国立市」からの報告を受けて

公民館評価を「よりよい公民館事業（公民館活動）を創造するための営み」として捉えることで、「評価表」の作成にとらわれない、ダイナミックな取り組みが浮かび上がってくる!?



【地域公民館研究集会】

- ・「松川町公民館研究集会」（長野県）
- ・「阿智村社会教育研究集会」（長野県）
- ・「相模原市公民館のつどい」（神奈川県）
- ・「木更津市公民館のつどい」（千葉県）
- ・「共に学ぶ市民の集い」（千葉県君津市） etc.

◆松本市公民館研究集会

- * 「各地域での学習活動や生活の中での問題を持ち寄り、あらゆる立場の住民や関係職員が参加・交流し、課題の共有化を図り、地域づくりの拠点となる公民館の位置付けを再確認し、今後のあり方や活動のひろがり可能性を模索・研究する場にしたい」

※永田幸彦・矢久保学・高山佳範「実践の学びあいと自治 ― 松本市公民館研究集会から」『月刊社会教育』（2009年9月号・国土社）より

◆国立市公民館運営審議会「答申」で提起された「公民館活動をふりかえる会」

- * 「市民・職員・行政管理者が一堂に会して、公民館事業をふり返る会を年1回開催する。それぞれ違う立場のものが、同じ事業の目的や成果をともに話し合うことで、次年度以降の新たな展開が生まれることを期待する。」
- * 「社会教育における市民の学習は、個々人の学びとともに他者との学び合いの中で行われるものである。学びを個人的なものにとどめず、他の市民・職員とともにふり返る機会をもつことで、より深くより広がりをもって学習が自分のものとなり、地域で展開できる力をつけていく。」
- * 「公民館職員が事業のふり返りの機会をもつことは、自分が企画立案し、実行した事業の手ごたえや反省を立場や視点の違う人々と共有し、意見を受け止めることで、社会教育を担う職員としての専門的力を鍛え、さらなる事業実行力を高めることができる。」
- * 「行政管理者は、公民館がどのように社会教育を実践しているか、その実際に触れることにより、数字では表せない地域や現代の課題に取り組む事業の価値をより一層理解することができる。」（「行政管理者」＝公民館事業の予算や体制に対して重要な影響を有する多様な主体）

※第30期国立市公民館運営審議会答申「国立市公民館の事業評価のあり方について」（2016年）より



「松本市公民館研究集会」「公民館活動をふりかえる会」のような地域公民館研究集会は、住民と職員が共同で公民館事業（公民館活動）を省察し、よりよい在り方を模索（学習・研究）するための機会!! 「評価のための実践」として自覚的に取り組まれてきたものではないが、評価実践としても豊かな価値を有している。

【参加型評価 (participatory evaluation) とは…】

評価対象となる社会プログラムの主要なステークホルダー (=利害関係者) が、評価に参加し、評価のプロセスを共有することによって、評価の質を高めていこうとする評価理論・方法。

- 「評価者」⇔「被評価者」の非対称な関係を越えることを志向する評価理論・方法
- 「客観性」よりも、「有用性」「正当性」に力点を置く評価理論・方法
- ステークホルダーによる「対話」が評価方法の中心

(参加型評価が注目されてきた背景)

- 1970年代より、ODA・NGO (国際援助・協力) の分野で注目されてきた。
- ・従来の評価では、評価結果を重視する一方、その結果が十分活用されない。

(参加型評価の特長)

- 評価のプロセスがステークホルダーの相互学習として作用し、①評価対象となる社会プログラムの改善、②ステークホルダーの相互理解・変革につながりやすくなる。

※参加型評価については、源由理子『参加型評価 — 改善と変革のための評価の実践』(晃洋書房・2016年)を参照されたい。



地域公民館研究集会には、参加型評価と相通じる側面が多い。

- ▶ 「公民館活動の主体である住民」と「その学習を支援する公民館職員」を中心に、公民館活動に関する多様な主体 (地域団体・NPO等) が一堂に会し、「実践発表」と「討議」を通じて、よりよい公民館事業 (公民館活動) の在り方を共同で模索 (学習・研究) していく機会。
 - (公民館職員だけでなく) 住民等にも開かれた参加型の評価プロセス
- ▶ 公民館事業の課題 (その根幹となる住民の生活課題・地域課題) や、公民館そのものの課題 (制度的な課題等) が発見・共有され、新たな公民館事業 (公民館活動) や、公民館の維持・改善に向けた取り組みを生み出す契機となっている。
 - 「評価すること」に留まらず、相互理解、改善に向けたアクションを志向する評価



公民館をめぐる危機的状況の中で…

- ・指定管理者制度の導入
- ・有料化 (受益者負担)
- ・補助執行による首長部局への移管
- ・コミュニティセンター化 (貸館化・「公民館的なもの」への再編)
- ・職員体制の弱体化 (人員削減、非常勤化) etc.



公民館の存在意義を明確化・共有化していくためにも、
地域公民館研究集会のような取り組み (≒参加型評価) の重要性が増している!?

第三課題別集会「公民館としての魅力ある講座とは」

助言者 月刊社会教育編集長・元埼玉県富士見市鶴瀬公民館長 金田光正氏
事例報告者 東大和市立蔵敷公民館 富田泰之氏
 小金井市公民館本館 笈本孝文氏
司会 小平市立小川公民館 小山豊氏
企画運営 東京都公民館連絡協議会職員部会運営委員

職員部会としては今年度、公民館職員として経験が浅い職員が多く集まった。そこで、日ごろの業務に関わる悩みを共有する中で、「公民館としての魅力ある講座とは」というテーマの元に、一年間、学び合うこととなった。9月には、本日の助言者でもある金田光正氏を招き、本日と同タイトルでの学習会を行った。この課題別集会では、この一年間、職員部会として学び合った内容の報告の場として、また、日々の取り組みの検証の場も兼ねて、職員部会メンバーの事例報告を題材に参加者と共に学びを深めた。

1 事例報告

(1) ①「子育て世代対象講座」

東大和市立蔵敷公民館 富田泰之氏

私は、平成21年に東大和市に入庁いたしました。2つの部署を経験した後、今年度、蔵敷公民館に配属になりました。

東大和市で開催する子育て世代対象講座は、「多くの市民が利用できるように、子ども対策事業及び親子対策事業を充実する」という公民館の重点目標に基づき、実施しています。

例年、子育て期の親を対象にした内容の講座を実施しており、主に保育付講座として実施しています。

しかし、蔵敷公民館は保育室がなく、講座の時だけ通常の部屋にパネルマットを敷いて利用していましたが、その形態ではなかなか自主グループ化が進まないという課題もあり、今年度からは保育付講座を実施せず、関連講座を工夫して実施することになりました。



そこで、概ね0歳から3歳までの子を持つ親を対象にした、子育てに関する疑問、悩みを解消する講座をやってみることにしました。考えられた問題点としては、何点かあげられましたが、何よりも、保育付講座ではないため、受講をためらう方が多いのではないかとの懸念がありました。それをどのようにクリアしていくのか。改善策としては、受講中に子どもが動き回っても良い雰囲気作り、部屋作りを心掛けました。

講師は、保育士にお願いすることにいたしました。0歳から3歳の子どもに対する悩みなど、保育士のノウハウによって解消できることが多いと思われたからです。講師の保育士と相談しながら内容を詰め、子どもと一緒に受講できるという特徴を伝える広報活動にいたしました。

こうした工夫を重ねた結果、すべての回で募集定員を満たし、出席率も90%を超すことが出来ました。

受講者アンケートでは、「自由な場所・空間にさせていただけたことで、子どもも楽しそうにしており、親も安心して講座を聞いた」との声があり、こちらの思惑が実を結んだようで、嬉しい反応をいただきました。

施設をうまく利用し、工夫することで、講座を成立させることができました。さらに、効果的な講座にしていくためには、受講者の意見を聞き、工夫を積み重ねていく必要があると思います。

②「野菜づくり講座」

小金井市公民館本館 筈本孝文氏

私は民間企業から転職し、公民館に配属になり3年目を迎えました。2年目から、この「野菜づくり講座」に関わっています。その経験を通じ魅力ある講座について考えてみようと思います。



この講座は、市民の受講者を募り、班分けをし、協力しながら野菜を栽培する講座です。講師の指導のもと、年間を通じて種まきから収穫、堆肥

づくりまで一連の作業をおこないます。その他、見学研修、収穫物を食し交流を深める懇親会、野菜づくりに関する勉強会などをおこないます。

小金井市は都市近郊型農業が盛んなこともあり、そんな地域の特色に関心をもち、かつ仲間づくりをしていただこうと昭和53年に開始されました。

講座は4班に分かれ、一年間のプログラムでおこなわれます。実施回数が45

回を超えるにもかかわらず、出席率が85%を超えています。

参加者は、どこに魅力を感じ、休まず来ていただいているのでしょうか。担当職員なりに考えてみますと先ずは、毎回、何かしらの収穫物が貰えるからだと考えられます。また、身体を動かせる講座であり、運動代わりにちょうどいいとの意見もあれば、毎週1回、2時間というのが適当な長さであるとの意見もあります。ほか、農についての知識欲を満たせる点や講師の人柄のお陰、参加者同士のちょうど良い人間関係の距離感などを魅力と感じていただいている方もいらっしゃいます。

これまでを振り返りますと、野菜づくり講座を形作る様々な要素が参加者に取り、魅力に映り、休まずに参加する状況が生まれているのではないかと思います。また、年間を通じ共同で農作業をすることで、人と人のつながりの構築や環境に対する意識の向上など、多くの学ぶ機会をもたらしているともいえます。

今後、さらに魅力あふれる講座とするためには、幅広い世代間交流や若年層の参加を呼びかけ、自主グループ化へとつなげることが必要になっていくでしょう。

(2) 事例報告に対する総評 助言者：金田光正氏

先ずは、子育て世代対象講座から。気楽に参加できる工夫作りをしてきたのが非常に良かったのではないかと思います。この講座を通じて疑問や悩みを解消する、また仲間作りを目指したのではないかと思います。3回の講座で、果たして悩みが解消できたのだろうか、まだまだ消化不良のところがあったのではないかと感じました。



その中で、どのくらい仲間づくりが出来たのか、そのことが、今後の課題になるのかなと思います。子育て世代講座の意義は、地域の中で子どもを育てることで大変、悩んでいる人たちに寄り添いながら、どういう風に支援できるのか。そういう視点から、講座を組み立てていく必要があると思われまます。

次に野菜づくり講座は、40年続いているという非常に歴史のある講座です。ここまで続いてこられているのには何か意味があるということです。それは何なのか、なぜ続いてこられたのか、その辺をもう少し掘り下げると、魅力につ

いてのヒントが得られるのではないかと思います。アンケートからも、「楽しかった」、「仲間が得られた」、「健康になった」と挙げられていますが、それは魅力ある講座を考える時に大切な視点ではないかと思います。講座は楽しい、自己解放が出来るなどは一定の成果ではありますが、さらに、講座終了後、それっきりになってしまうのか、はたまた他の市民農園に携わる人もいたのか、学びの継続性、将来ビジョンはどうあるべきかなど、そんな視点も大切ではないでしょうか。

2 事例報告を踏まえてのグループワーク

(1) 意見交換

職員部会メンバーによる2件の事例報告、その総評を踏まえ、参加者が7名程度8グループに分かれグループ討議を行った。

討議内容は、

ア 2つの事例の感想

イ 今まで魅力的だった講座の紹介とその理由

ウ 公民館としての講座の魅力の要素

の3つとし、全体で60分間の時間を用意した。どのグループも白熱し、活発した意見交換がみられた。



(2) 発表

Aグループ

2つの事例の感想

【東大和市の事例について】

- ・子育て事業は素晴らしいことだが、グループ化目標、継続性を考えるのは公民館の役割である。広報の仕方はおもしろいと思う。
- ・保育室がなくてもできる、限られた中で工夫している熱意を感じる。

【小金井市の事例について】

- ・継続できる講座ということすごいと思う。
- ・公民館らしい講座。
- ・野菜作りという共同作業を通して人づくり、地域で人とつながることのきっかけになる、ということが大きく、その点が魅力ある講座だと思う。

今まで魅力的だった講座の紹介とその理由

- ・講師の人柄、話し方がうまいことにつきる。話術講座「笑いとユーモアがある話し方教室」

公民館としての講座の魅力の要素

- ・講座自体の魅力、講師の手腕によるところが大きい。
- ・スキルだけではなく人との出会い、地域でのつながりがあるということ。また、グループにならなくても、顔見知りができる、挨拶ができるなど、小さなつながりができることが公民館としての講座の魅力ではないか。

Bグループ

2つの事例の感想

【東大和市の事例について】

- ・保育室がない中で努力していること、親子一緒に講座を実施したのは素晴らしい。
- ・母親だけで、自主参加で企画する事業も積み重ねていかなければいけないのではないか。
- ・保育室がある公民館について、現状使い方はどうなっているのか？

【小金井市の事例について】

- ・親子参加やリピーターが多いことは良いことだが、初めて参加の方がうまく溶け込んでいるのかが疑問。
- ・40年続いているということは素晴らしい。ただ、40年続ける意義は？同じ講師にお願いしているとのことだが、講師がいなくなったらどうするのかなど、40年続いても疑問があれば持った方がよい。長く続いている講座では、事業を掘り下げることも必要。



今まで魅力的だった講座の紹介とその理由

- ・現代美術。新しい刺激をうけた。
- ・初心者向けのもの。様々な世代の人が集まった。

Cグループ

2つの事例の感想

【東大和市の事例について】

- ・日程が3回では短いのではないか。継続するのがむずかしい。学びの継続が課題。
- ・子どもと一緒に講座なので、交流できて良かったのではないか。
- ・広報については、工夫されていて参加しやすい講座になっている。
- ・母親がひとりになる時間も大切なので、保育付き講座も重要。

【小金井市の事例について】

- ・40数回の講座でとても苦勞されたのではないか。
- ・サークル化することが課題ではないか。

公民館としての講座の魅力の要素

- ・「魅力」は、個人の感覚で人それぞれ違うため、一概に言うことはできないが、参加人数の多さ＝魅力的ということではなく、講座の内容が重要である。
- ・市民の方が自主的に楽しく学習できるきっかけを作るのが公民館職員として必要であり、市民の方の学習要求や問題点を考えることが、魅力ある講座への第1歩である。

Dグループ

2つの事例の感想

【東大和市の事例について】

- ・子どもと一緒にフランクに参加できる講座は、新しい発見である。
- ・保育士の方に相談する、ということは参考にしたい。

【小金井市の事例について】

- ・人間関係がスムーズにできそう。外での講座は、館内の講座と違い、リラックスでき、リフレッシュするので、参加しやすいと思う。
- ・グループ化の点など参考になった。
- ・空いた農地の活用に活かしたい。
- ・農業を志す女性のヒントにしたい。

【講師へ質問】

- ・2つの事例を踏まえて、どのようにしたら発展することができるのか？

Eグループ

2つの事例の感想

【東大和市の事例について】

- ・子育て世代に公民館を利用して欲しいがなかなか難しい中、年齢、対象の絞り込み、曜日の工夫、また苦労があったとは思いますが親子同室という設定は、良かった。結果として参加者にとって魅力的だったのではないかな。

【小金井市の事例について】

- ・全体としてのグループ化は難しいが、参加者の中から小さなグループ、班などで仲間はできている。つながることができているということなので、良かったのではないかな。

公民館としての講座の魅力の要素

- ・「魅力」とは、参加人数が多かったというよりは、講師の大切さ、参加者の達成感、充実感を得られることではないかな。
- ・講座を受けた後に、例え細々とでも地域とつながっていられることが、「魅力的」ということではないかな。

Fグループ

2つの事例の感想

【東大和市の事例について】

- ・敷居をさげて新しい人に来てもらったという点で良い講座であったのではないかな。

【小金井市の事例について】

- ・長年やっている中で、内容の見直しはどうか。
- ・工夫次第で改善点がみつかるのではないかな。



今まで魅力的だった講座の紹介とその理由

- ・福生市「散策マップ作り野鳥編」。講師からあれこれ教えられず、自由にやってよい講座で、公民館らしい講座だった。魅力的だった。
- ・シニア向け動画を撮る技術を学ぶ講座。動画編集作業が難しすぎて、2回目以降人数がかなり減ってしまった。改善点が多くある講座だった。
- ・シニア向けドラム講座。参加者の満足度も高く、グループ化された。

公民館としての講座の魅力の要素

- ・笑顔で来ることができるような地域の居場所づくり、つながりが持てることが公民館であり、カルチャーセンターとの違い。

Gグループ ※感想発表からフリートークへ

【公民館の良い面】

- ・子育て支援に力を入れている。
- ・人気があるのは、音楽、落語、時事問題、クリスマスリース作り（小学生）、土曜日の子ども広場（小学生、親対象。公民館を知ってもらうよい機会）。

【公民館の悪い面】

- ・存在が薄くなった。
- ・市民が企画できない。以前は市民に相談していたが今は職員主導の企画。
- ・もっと相談にのって欲しい。
- ・社会教育主事を配置して欲しい。コミュニケーションを取れる人を配置して欲しい。
- ・新しい人を取り込めていない。若い人が来ない。
- ・公民館自体を魅力ある場所にして欲しい。

【まとめ】

- ・職員の力量が問われる。
- ・学びの継続が必要。サークル化、地域への還元。



Hグループ

2つの事例の感想

【東大和市の事例について】

- ・子どもと一緒にやる工夫は良かった。
- ・10組は少ないので、自主グループ化が難しいのでは。ただし、他市で保育室利用ができるところでも同じように人数制限はある。
- ・上のお子さんがある方は参加しにくくなるのが課題ではないか。
- ・子どもと離れることに抵抗がある方がいるので、同室の講座はよいと思う。

【小金井市の事例について】

- ・参加費が安い。負担割合はどうか。
- ・平日開催なので、参加者が偏るのではないか。土曜日開催なら若い方も参加できるのではないか。
- ・公民館なので「高齢者向け」と特化してもよいのではないか。

今まで魅力的だった講座の紹介とその理由

- ・国立市「シルバー学習室」その後の仲間づくり、グループ化が魅力。
- ・講座の存続を考えるなら、講師料を見直すことも必要。
- ・広報の仕方も工夫が必要。市報だけでは伝わらないのではないか。
- ・若い人に聞いてもらいたい内容でも、若い人を集めるのが難しい。若者を取り込む講座を企画することで回避できないか。

3 総評と質疑 助言者：金田光正氏

この課題別集会には職員、公運審委員、企画委員のみなさんなど公民館に関わる



方々が集まっていますが、それぞれの垣根を越えて議論するということは大事だと改めて思いました。

こういった場をそれぞれの公民館でどう日常的に行うかが、実は大きな課題ではないかと最初に感じました。

(1) 事例発表について

「子育て世代対象講座」

保育室については全国的にもそれほど整備されているわけではありません。保育室のない公民館でも別室を確保して対応した例や、同室保育を行ったこともありました。例えば、専門的な学習を行う場合は、やはり集中できる環境をどう作るか、ということも必要だと思います。学びの環境をどう保障していくかという視点からも、保育の問題を考えていく必要があると思いました。

子育てもかつてはいろいろな人の協力で成り立っていましたが、今は一人で抱えなくてはならない状況もあります。そうした中で子育ては今、大事な学習課題であると思います。そこは公民館だけで解決を図るのではなく、市全体で子育ての環境をどうよくしていくのか、という視点からこの講座を位置づけていくことが必要です。

「野菜づくり講座」

講座がいろんな人がつながるきっかけになっているようです。そこをどう意識的に拡充していけるのが大切です。例えば、「講座をきっかけとした人の輪を地域に築いていく」「もっと市民が主体的に運営できるような仕掛けはないか」「3館での合同の学習会やネットワークも考えられる」等。それが地域の「食と農」を考えることにつながることもあるでしょう。当初の講座の目的にはそうした要素も盛り込まれていたようですし、そのへんを念頭に入れながらプログラムを練り直す部分があってもよいのでは、と思いました。

(2) グループ討議

グループごとの話し合いでは、講座の魅力として「テーマ」「講師の面白さ」「人との出会い」などがあがり、一方で「職員の力量」、「学びをどう継続するか、学びを地域にどう還元するか」といった課題もあがりました。「もっと若い世代や子供が参加するような工夫も必要ではないか」という意見もありました。

それらも踏まえて市民にとって講座の意味をどう考えるかについて、4 つほどの柱で考えてみました。

(3) 市民にとって講座の意味を考える

①楽しい場、自己解放できる場としての講座

私はかつて「リハビリ健康づくりの集い」というのをやっていました。参加者の一人 A さんはリウマチを患っている方でしたが、「この集いに参加してい

る間だけは痛みが消える」とおっしゃっていました。地域で自分を取り戻せる場所や時間の大切さをあらためて教わりました。また、市民大学に車椅子で毎回熱心に参加されていたBさんがある時欠席されたのでどうしたのかと調べていたら、その後亡くなられたことがわかったのですが、この人にとって学ぶことはまさに生きることだったのかと思いました。講座とは楽しい場であるとともに自己実現できる場でもあると思います。

②悩みや不安を解消できる学びの場としての講座

かつて子育てで孤立感を抱いていた時に、職員に誘われて保育付きの公民館講座に参加されたCさん。先日、座談会でお会いした時に、公民館での学びについて「仲間とともに学ぶ中で、私たちが苦しいと感じていることが、個人の問題ではなく社会の問題であることに気づきました。」とおっしゃっていました。その後、市民センターの改築問題などにも中心的に関わっていきます。講座が人の生き方、考え方を変えるきっかけになったという事例です。

③地域や仲間との出会いの場としての講座

ギター講座に参加されたDさん。仕事帰りに疲れて参加する時もありましたが、講座終了後もサークルを結成し、今も文化祭への参加や施設の慰問活動などをされているそうです。彼自身もその後、公運審委員や社会教育委員をされたりしています。講座への参加が地域の人との出会いに、また地域との出会いにもつながった事例といえます。

④地域の明日を拓く学びの場としての講座

「老後問題講座」をやった時に、在宅介護、認知症、尊厳死などの問題から地域医療のあり方まで学習しましたが、市の高齢福祉課や健康増進センターなどにも講師をお願いし、連携を図ってきました。そうした中、「高齢者の居場所づくり」の話があがって、市内35の公民館と連携して「福祉ひろば」を開設している松本市に見学に行きました。その後、公民館に「介護予防施設ふれあいサロン」が併設されました。講座が地域を変えるきっかけになったといえます。

(4) カルチャーセンター講座と公民館講座の違い

①公民館の講座は市民をお客さんにしない、学習の主人公にする

講座の参加者を単なる参加者で終わらせるのではなく、「次に自分はこういうことを学びたい、ならば企画に参加してみよう」というように、市民が主役になる仕掛けを作っていくことが、公民館講座においては大切です。

②自主的な継続学習を支援する

講座終了後も自主活動などの継続的な学びを支援していくことが公民館の重要な役割です。ここはカルチャーセンターとの大きな違いです。

③地域の人々と繋がる学び

さらに、カルチャーセンターは地域との出会いの場とはなりにくく、その点、公民館の学びは地域の人たちと一緒に学ぶという側面があります。

(5) 魅力ある講座を作る職員・公運審の役割

①講座の位置づけや狙いを深める

どんな学習要求・学習課題があつて、どのような目標をもたせるのか。そうした視点で講座を見直していくことが必要だと思います。

また、今後の公民館の講座では、課題を抱えた人々（元気でない高齢者、障がい者など）の問題にどう応えられるか、ということが大事だと思います。

②気楽に参加しやすい講座テーマや丁寧な周知

そのためには、事例発表にもありましたが、ハードルを低く、参加しやすい工夫や、丁寧な周知（チラシなど）が大切です。

③本音を語れ、人間関係が深まる講座運営の工夫

結果としてつながるといふのもよいとは思いますが、それを意図的にどう作り出していくか、例えば前回の講座のまとめに参加者の声を載せて通信を発行するとか、講座終了後に懇談会をやるというのもあっていいと思います。

④講座終了後のフォローやその後の学習支援

講座終了時が一番重要で、そこで何を投げかけるのか。また、サークル作りに至らないような場合に、既存のサークルを紹介するなど、学びを継続できるようなフォローをすることも大切です。

⑤市民と共に創る講座づくり

今回の講座の参加者と次の講座を企画する、または来年の講座の運営をするといったように。それが地域に根ざした学びのプラットフォームになっていくと思います。人数は少なくても、そうした人たちときちんとつながっていくことが大事です。そういう人たちが、その後の地域での学びをつくっていく上で重要な役割を果たしてくれる人たちなのだと思います。

⑥豊かな地域をつくる学びのネットワーク

市民グループ、学校や行政などとも連携し、「地域で求められている学びとは何か」を、公民館が中心となって一緒に考えていくことが大切です。

そうした学びのネットワークづくりは公民館だけでできるものでないので、企画実行委員会制度があればそうした場を通じて、またそうした制度がなくても公民館に関わりあう市民と一緒に講座の企画を進めていくことが大事です。

(6) 最後に

長野県飯田市の公民館長の長谷部さんという方がいて、この方は飯田市で

も山間の過疎地域に「風土舎」というのをつくって村おこしをされてきた方ですが、こんなことを言っていました。

「住民は土の人、職員は風の人、風は土に向って、たくさんの花の種を蒔けるように、強く風を吹かせるのが役割なのだ。土は自らの力で美しい花を咲かせるのが役割なのだ。」

住民たちが自分たちの力で地域をよくしていくわけです。そういう住民に対していろんな風を吹かしていくことが職員の役割だと。公民館の学びの主人公は住民です。私もまさにこの言葉を身にしみて受け止めたわけです。

質問

公民館において指定管理の問題はどのように考えますか。図書館などでは指定管理が導入されている自治体もかなりあるとも聞くのですが、公民館では今後どのようになっていくのでしょうか。

回答 私は基本的に公民館とは教育委員会の管轄のもとで、直営で運営すべきものであると考えます。が、実際にはそれぞれの自治体の事情もあって、そうではない状況は生まれています。そうした条件の違いはあっても、住民の学びがどう保障されていけるのかという点が重要です。

指定管理の一番の問題は「5年ごとの見直し」がある点です。5年間積み上げてきたものが、事業者が変わると人も変わって1からやり直しとなる場合もあります。それでは学習の継続が保障できなくなります。

もう一つの問題は「安あがり」に進めざるを得ない点です。結果、職員の給与も低く抑えられる中で、良い仕事をするには我が身を削らざるを得ない矛盾を抱えながら働くという問題もあると思います。

とはいえ、指定管理になったとしてもそうした問題を改善しながらやっていくということも大事だと思います。



第4 課題別集会

地域と公民館を結び付ける地域学習を考える

討議内容 公民館の置かれた環境は厳しくなっています。利用者の要望や課題は多様化しています。時代の変化に対応できる柔軟な発想と、自由な取り組みを考えます。

助言者	倉持伸江氏(東京学芸大学准教授)
事例報告者	石田裕子氏(西東京市公民館運営審議会会長) 松永尚江氏(西東京市田無公民館専門員) 石毛和夫氏(熊川分水に親しむ会会長代行) 遠藤弘文氏(昭島市公民館職員)
司会	白崎好邦氏(町田市・委員部会副部会長)
企画・運営	東京都公民館連絡協議会委員部会運営委員

事例報告 1

「公民館の学びがまちをつくる」

事例報告者：石田裕子（西東京市公民館運営審議会会長）
松永尚江（西東京市田無公民館専門員）

1. 平成 26 年度の公民館講座の企画について

地域課題の解決のための学びを市民に提供する。(西東京市は貧困率が多摩地域の中で6位と高い)

(1) 地域課題である「子どもの貧困」をただ知識として学習するのではなく、地域の大人として自分たちに何ができるかを具体的に考え合う講座としました。

◎田無公民館主催社会問題講座「子どもの貧困に向きあう地域をつくる」全5回（定員20名に対し41名の応募があり、抽選の結果26名参加で15名が抽選漏れとなりました。）



2. 講座参加者をつなげる

(1) グループ討議の機会を多く持ち、参加者同士の連帯感を深めました。講師は西東京市内の現場で活躍中の方を中心にしました。養護施設の設長、児童館運営の委託NPO(西東京子どもアミーゴ)、無料学習支援団体(稲門寺子屋)、

ニートひきこもり対策事業委託 NPO（文化学習協働ネットワーク）、西東京市生活福祉課主幹、しんぐるまざーずふぉーらむ代表などです。

参加者は毎回感想をカードにその都度感想を記入し、それを次の会に無記名で全員に配布し感想を共有しました。他の参加者の想いや、どんなことをやりたいと思っているかを見える化しました。

3. 5回の講座終了後、サークル立ち上がりを支援

(1) 2回の事後の会を通じて、参加者たちがサークル「西東京わいわいネット」を立ち上げることが決まり、平成 27 年 3 月その活動の柱を「食事の提供」と「学習」「市内の子ども関係の団体と連携」に置きました。平成 27 年度田無公民館主催講座「月 I T H I クッキング」で、西東京わいわいネットの共催で、年 7 回「わいわいクッキング」を展開しました。「わいわいクッキング」を展開しながら、サークルメンバーが自分の住む地域に「子ども食堂」を作り始めました。

4. 講座パート 2 の開催

サークルメンバーが活発に動く中、更に学習の必要性を感じ「子ども食堂」の草分けである「豊島わくわくネットワーク」の栗林知絵子氏等が展開するプレーパークの見学などを盛り込んだ講座を開催しました。

田無市公民館主催社会問題講座「子どもの貧困に向きあう地域をつくる」パート 2 全 5 回を平成 27 年 10 月～12 月に開催し、パート 2 からの参加の受講生が新たな「子ども食堂」を地域に展開しました。(木々、放課後キッチンごろごろ、しばくぼーの) 等です。平成 28 年度は田無公民館主催「わいわいクッキング」を西東京わいわいネットと共催で年間 12 回開催し、学生ボランティア（固定メンバーは少ない）も毎回参加してくれました。

西東京わいわいネットは「西東京市市民企画事業」を活用し「子どもの貧困・格差社会」について考える企画を展開しました。

子ども食堂「未来」、飯もり山、柳沢子ども食堂等子ども食堂もさらに増えました。

5. 学習支援を開始（平成 29 年度）

平成 29 年度は、公民館からサークル「西東京わいわいネット」がひとり立ちして自主的に「わいわいクッキング」を展開しています。

学生の参加も目立ってきたことから、学生の協力を得て学習支援も始まりました。こうした中、市内の大学「武蔵野大学」の学生 9 名が「子どもの居場所」をテーマに「西東京わいわいネット」の取材をもとに卒論「9つの視点から」を作成しました。

田無公民館主催講座「このまちに子どもの居場所をつくるために」全 6 回（定

員 25 名に 38 名の応募があり全員参加とした) を平成 30 年 1 月 6 日から開催しました。不登校などの子どもの居場所づくりのために学び合い、今後は居場所づくりにつなげていきたいと思えます。

6. 学生子ども食堂の開始(平成 30 年度)

ボランティアで参加していた武蔵野大学の学生が「自分たちで子ども食堂と学習支援を展開したのだが・・・」と公民館に相談に訪れました。田無公民館との共催で「学生子ども食堂」を 4 月から月 1 回展開することになりました。
終わりに

「公民館の自由な学び」は無数の可能性と広がり秘めています。市民や学生たちのやる気や良心を引き出す事業の企画が今後、更に期待されます。

事例報告 2

福生市公民館と「熊川分水に親しむ会」の活動

報告者：石毛和夫(熊川分水に親しむ会会長代行)

熊川分水に親しむ会は、平成 16 年(2004 年)に福生市公民館(白梅分館)で行われた講座を契機に生まれた団体です。これまで公民館(白梅分館)と協力して地域の歴史・環境財産である「熊川分水」に関する情報収集と発信、保全啓発活動を行ってきました。公民館協働の経緯と現状について報告します。

1. 熊川分水について

承応 2 年(1653 年)急速に発展する江戸の水問題を解決するために玉川上水には、その後、多くの分水がつくられて新田開発などに活用されてきました。明治期になり熊川村で造り酒屋の酒造精米用水車の動力源として、森田製糸場も絹輸出の興隆とともに製糸用水の必要を感じていました。明治 23 年(1890 年)全長約 2 km の熊川分水を完成させました。この分水は上記の産業用水だけでなく熊川村民の生活用水(飲料、洗い物、農作業等)にも使われてきました。しかしほどなく産業用水としての必要性は低下し、昭和 30 年代には上水道が各戸に行きわたって生活用水としての分水の役割も終了しました。開削当初すでに百数十戸が存在していた村に分水を通したため、今も大部分は民地を通っています。現在、分水は暗渠化が進んでいますが、開渠部には開削当時の工法である「空石積み」が現在も残っているところも多いです。



2. 福生市行政における「熊川分水」の位置づけ

都市計画マスタープランや緑の基本計画、環境基本計画、まちづくり景観基

本計画で、熊川分水は、取り上げられています。

3. 熊川分水に親しむ会

平成15年に福生市公民館（白梅分館）主催講座として連続講座「熊川分水再発見」が開催され、受講者は熊川分水に関する知識を得るとともに、分水が魅力的な地域の財産であることを知りました。平成16年2月に上記講座に、熊川分水の保全に関心を持つメンバーが集まり「熊川分水を考える会」が発足しましたが、同年4月に現名称「熊川分水に親しむ会」に改称しました。

本会の活動方針

- (1) 市民や子ども達が熊川分水に親しむ機会の提供
- (2) 熊川分水の保全
- (3) 地域の歴史や他の分水・用水路の勉強

4. 公民館との協働活動

- (1) 熊川分水に親しむ講座

毎年9月～10月に4回の連続講座を公民館が開催しています。内容は①熊川分水の歴史、②分水と人々の生活、③分水の自然環境の3回を座学で行い、最終回は④熊川分水を歩く、という現地ウォーキングを実施して座学で得た知識を確認するという構成になっています。講師は本会の会員が務めることになっているが、毎年同じテーマでも内容に変化をもたらすため苦労しています。

- (2) 熊川分水たんけん隊

公民館は夏休みの日「森田製糸場跡地」を借りて開放し「熊川分水夏休みたんけん隊」を実施しており、本会とNPO法人自然環境アカデミーが協力しています。

子ども達（大人も）は熊川分水に入って魚や小動物をとり製糸場跡地の草原で昆虫を採って過ごしたあと、本会会員である講師から採取した動物について説明を受ける構成の行事です。魚や虫は説明会終了後に分水と草原に戻しています。

- (3) 白梅まつり

白梅分館では年一回、公民館（分館）利用者が活動成果を発表展示する催しを開催しています。本会も、会の活動や調査結果の展示を行って熊川分水に関する情報発信を行っています。この展示で一方向的に発信するだけでなく、来場者からも新しい情報が得られる貴重な機会となっています。

- (4) 熊川地域の歴史掘り起し

歴史学習会を開催し、熊川村で育ったお年寄りから昭和初期の熊川分水、熊川村の様子を聞き冊子にまとめました。聞き取り内容は、分水、熊川神社、

森田製糸場、かつて賑わっていた商店街などに及び、その記憶をもとに商店の位置を確認して昭和初期の熊川銀座商店街図を作成しました。成果は冊子「語り継ぐ熊川村・熊川分水の歴史 歴史学習の記録と古老からの聞き書き」となりました。

5. 地域との共同活動など

小中学校の生活たんけん授業、まちの宝さがし授業で熊川分水周辺の観察を補助し質問に答えるなどの支援を随時行っています。

また、福生市観光案内所「くるみふっさ」が主催する分水案内ツアーには市外参加者が多く熊川分水や熊川の歴史 PR の貴重な機会として、本会の会員がガイドを務めています。

また、会の活動として各地の用水路や湧水など水環境資源の視察見学を実施して熊川分水保全活動の参考とすべく学習を行っています。

6. 市との協働への波及

福生市の水辺環境整備の一環として南公園の一面につくられたビオトープの湧水時補水対策として、熊川分水流末部から水を廻してビオトープが枯れないような工事を要望し、実現しました。

江戸時代熊川村は水不足に悩んでいたが、村を知行した旗本（長塩氏）が村民に与えたと伝えられる井戸が一つだけ現存します。歴史学習材料として活用できるよう井戸の体裁を復元（明治時代のスケッチに残された釣瓶を模して再現）しました。

民地内の分水も「福生市まちづくり景観条例」に定める「景観重要資源」に指定されることで、改修に対して市の技術的・資金的支援が得られる制度の活用を検討してほしい旨を市に要望していたが、平成 29 年 9 月に分水の 9 か所が景観重要資源に指定されました。指定箇所は、449m（分水全長の 22%）開渠部の約 40%が該当します。

まとめ

地域の歴史・景観財産である熊川分水を残していきたいというメンバーで構成された「熊川分水の親しむ会」の地域活動について、公民館との関わりを中心に述べました。

- (1) 公民館講座が契機となって会ができました。
- (2) 公民館と協働することで継続的な活動が可能となりました。
- (3) 地域に密着することで、分水や熊川村に関する知見が深められ蓄積できました。
- (4) 地域の要望として分水の重要性を市（行政）にアピールでき、分水の保全支援策に結びつきました。

事例報告 3

小学校との連携事業「学校の総合的な学習の時間の活用」

報告者：遠藤弘文（昭島市公民館職員）

今回紹介する小学校との連携事業は、前公民館運営審議会への諮問「市民が集う公民館事業のあり方」から始まり、答申を受けたもので、公民館運営審議会委員である小学校長の協力により、平成 29 年 1 月・3 月にかけて開催し連携事業として最初の一步を踏み出した事業です。

1. 小学校との連携「学校の総合的な学習の時間」を活用する企画の実施

小学校の教育に公民館を取り上げていただき、子どもの時から公民館に関心を持ち、地域で活躍する素地を育てます。

(1) 小学 3 年生

①見学・インタビュー

小学 3 年生の社会科で「わたしたちの昭島市」に公共施設の一つとして公民館を取り上げました。見学、インタビューでどんな施設か、どんな人が働いているのか、どのように利用しているのか調べ、その後、館内及び当日活動している団体（折り紙、陶芸等）を見学しました。

(2) 小学 6 年生

①見学・インタビュー

小学 6 年生の総合的な学習の時間「まちづくりプロジェクト」で公民館を軸にしたまちづくりを考えました。地域を見直し、課題をもとに自分たちでできることを考えました。また、公民館を利用する人たちと交流を深めました。3 クラスが 2 日間に渡り来館し、どんな利用者がいるのか、館の使い方、小学生に何ができるか、職員の思い等の質問があり、回答後は当日の団体活動（ダンス、囲碁、合唱、大正琴、ヨガ、英会話等）を体験しました。

②発表会の開催

地域の人との関わりをとおり地域の良さや課題を見出し、これからのまちづくりに向け自分にできることを考えることをねらいとし、自治会・子ども会・花の会・読み聞かせ・あいさつ・地域との関わりの 6 つのグループに別れ、公民館で発表しました。発表会当日は、自治会・子ども会・団地の管理組合・地域見守り隊・家族等の方々が来館され、子どもたちより感謝の手紙の発表があり、地域の絆が深まりました。

2. 事業を終えての課題

(1) 今回は、公民館に一番近い小学校ということもあり実現したが、市内には他に 13 校あり、離れた学校は実現が難しい。学習共用施設として市立会館を利用し他の小学校とも連携を図っていきたいと思います。

- (2) 公民館の関わりは会場確保と活動団体との調整だけでしたので、次年度以降は、企画にも絡んでいきたいと思います。
- (3) 体験活動に協力していただいた団体を含め、公民館活動をしている団体を地域に還元できるネットワークを構築していきたい。
- (4) 小学生が参加できる事業を拡充していきます。

助言者論点整理

東京学芸大学に就職すると同時に国分寺市もとまち公民館（当時は市内5館の公民館それぞれに公運審が配置されていた）の公運審委員となりました。ほかの委員と一緒に公民館の直面する問題について議論し、活動を作り出していく中で、公民館や、公民館運営審議会委員について学びました。実際の公民館活動を通じて、公民館の良さ、大切さが体感できたと思います。皆さんも市民として職員として、公民館の大切さ社会教育の意味を感じていると思います。一方、公民館での活動を体験したことがない、知らない人はこうした意味や意義がわかりません。今日、伺った3つの事例は、それぞれ公民館があったからこそ活動が始まり展開していると思います。これからの社会教育は、館に閉じこもっていてはだめ、仲間とだけでもだめ、他の団体と連携し価値をより広げていくことが大事だと言われています。3市の事例はそれが具体的になった例だと思います。

西東京市の事例は「何が出来るか、具体的に考え合わなければいけない」と行動しながら考え、それがさらに次のアクションへとつながっていきました。今取り組んでいる課題、目の前の困っている状況の解決に向けて、身近なことからやってみる、やりながら考え、作っていく、という展開から学べることが多いにある気がします。西東京市に子ども食堂が広がっていった展開を伺いましたが、公民館だからこそ広がって行ったのだと思います。

福生市の環境活動の事例も、西東京市と同様に講座がきっかけでした。講座修了生たちが自立した活動を発展させながら、公民館だけでなく、市民グループや必要に応じて社協、学校、行政の他の部署等とつながり、それをまた公民館に持ち込んでいます。公民館だけでは実現しなかったかもしれないことを市民の目線で自由に行動し、それをまた公民館とのつながりをもたらす、公民館のふところの深さもありました。

昭島の事例は、公民館運営審議会委員に校長先生がいたことがきっかけで、学校と公民館が連携した事業が実現しました。今回は学校が中心になってプログラムを企画しましたが、それを公民館と利用者グループが、それをどう受け止め、どうつなげて発展させていったか、私たちが学べる所は多いにあると思

います。

今日は、みなさん自身の実際の地域の課題解決に向けた連携や協働の取り組み、これからやろうとしていること、やろうとしたが上手くいかなかったこと等について情報交換していただけたらと思います
心おきなく議論し合い話し合いたくさんのことを持帰っていただきたいと思います。

グループ討議

7つのグループに分かれて、事例報告の感想や各市の課題について意見交換をしました。

グループ発表

Aグループ

公民館の魅力が「使ってない、来館しない」人に届いていない。公民館からの情報発信が重要です。個を得意とする社協と、面を得意とする公民館それぞれの良さを連携で補完したらと思います。地域学習には、地域の団体との協力が必要です。公民館職員のコーディネート力で団体と市民を結び付けることができます。



Bグループ

人との触れ合いが大切です。ロビー、レストラン、読書コーナー等、人の集まる場所として活用したい。新しい利用者を増やすには、職員に頼るのでなく、自分たちでできることがあるはずです。公民館からわかりやすい情報発信をしたいです。「来なければ何も分からない」から脱却したい。事例) スマホ操作のサロンを開設しています。教育ネットワークを作る講座を実施しました。独居で孤立しないよう公民館で関われないですか。

Cグループ

公民館だよりは内容が良くても、読んでもらえていません。もう一工夫が必要です。公民館の良さを人から人へ口コミで広げるのが良いと思います。人の繋がりが大事です。若い人に関心を持ってもらうのが課題ですが、保育付きの「子育て講座」でも集客は少ないです。講座案（外国人向けの交流講座、有名人による講演会、地域の高齢者の昔話、新住民向けのまち歩き講座、各種出前講座）が考えられます。

Dグループ

国分寺市では地域協議会がうまく機能しています。地域の各団体が協力して運動会等いろいろな取組がなされています。中学生の職場体験から出た意見を企画に活かして公民館祭りで発表しました。子ども食堂に関連して、フードロス運動で、地域の各種団体、企業と協力していきたいと思います。

Eグループ

利用者の高齢化、固定化が見られます。若い世代は地域との繋がりが薄く、新しい利用者はなかなか増えません。母子家庭が多く、貧困化が進み子ども食堂のニーズは高まっています。

すでに実施している市もありますが、運営上の課題も出てきています。地域と繋がりを作るのは、職員のコーディネート力によります。公運審は地域と繋がっているそれぞれの立場から力を発揮して下さい。

Fグループ

学校教育と社会教育は馴染みにくいのか連携を申し入れても、断られることが多い。小学生の時から公民館に関心を持ってもらう、きっかけ作りが必要です。近隣の高校の部活と連携し小学生に参加してもらう。子どもサークルの発表の場を提供する。職場体験で公民館に来てもらう等が考えられます。

Gグループ

地域の力を学校で活かすのに、利用団体による学級支援があります。家庭科での裁縫や料理の手伝いです。中学校区に一館あると連携が取りやすいですが、忙しい学校は外部との協力をわずらわしく感じる面もあります。学校関係者に公運審に入って貰い協力してもらいたいと思います。

助言者まとめ

各グループの話し合いの様子を報告いただきありがとうございました。それ



ぞれがいろいろな地域の実況を話し合ったにもかかわらず、最後の報告を聞くと共通するような課題があり、それぞれ条件は違いますが、似たような関心や課題が出てきたことを、あらためて確認できたと思います。この部屋のテーマは「地域と公民館を結びつける、地域学習を考える」ということです。そもそも地域の学習拠点である公

民館という館は、地域の学びにどう結び付き、1人ひとりの人生を豊かにしていくことができるでしょうか。多様化する現代社会の中で、地域ということ事態がつかみづらく捉えづらくなっている中で、どういった公民館が現代社会に適したあり方なのかあらためて考えさせられました。地域課題はどこにあるのでしょうか。今回の事例もそうですが、地域課題はふとした会話の中に潜んでいたり、実は個人的に悩んで相談された事だったり、地域の課題ということは身近な所に有るのではないのでしょうか。そう考えると様々な立場の人がいる公民館運営審議の会議が重要だと思います。それぞれの立場で、生活者、地元の住民、利用者として課題を出し合い共有することや地域の課題について学ぶことも必要なのではないのでしょうか。地域学習とは知ることと実際に行動し解決につながることが境界線なくつながっているもので、学び方や学びの構成の仕方等の工夫が必要です。

講師に地元のことを良く知る実践者や当事者、経験者をうまく取り組んでいくことは、実際に学んだ人が次に何かをしたい時に直ぐに顔が分かりつながるという利点もあります。実際、西東京市の例では、一般論として子どもの貧困を知るのではなく、その地域でどういうことに苦労し、どういう事をやろうとしているのかを知ることが、学びが行動につながるきっかけになったと思います。学び方も、話し合い学習や見学・体験があると思います。アクティブかつ交流のある方法が、学習に有効的だと思いました。それは講義がいらぬのではなく、効果的に組み合わせられているのだと思いました。また、どういう人にスタッフになってもらうか、巻き込み具合、多分皆さんやっていると思いますが、「今度こういう講義があるからチョット出て見てよ」といったことが、その後の活動を行う時に核になっていくと思います。事前に仕込むことや来た人を探ることもありますが、来てもらうことはただ待つのではないということです。それから講座後に自立した自主的グループが、ゆるやかにつながり必要な時に手を取り合っていく距離感やゆるやかさ等も必要だと思いました。そこから地域学習が自立的に発展し、住民たちの学習グループになって行きます。しかし、その学びや学習を閉じていないということが非常に重要であり、閉じないことに公民館の役割があると思います。中心的なメンバーは、公民館と一緒に講座を企画し記録として残すことや広報に載せること、おまつりで発表すること等、学習の過程の核となっています。中心でやってない人達は、たまに来る人やちょっと関心を持っている人で、広報やお祭りで他の人の目に触れるようになっています。そういったことも大事であり、途中で参加したい人や、やはりやりたい人、暇だった人等が介入できるよう公民館が機会を作ることです。予想外の反応や成果も見逃さないことが大事だと思います。やってみ

て分かることはたくさんありますが、行動しながらやって行くことが大事です。こういったことを実現していくためには、先程Eグループから出ていましたが、職員がコーディネーター的専門性とセンスと役割をはっきりすることが重要になってきます。

一方で公民館運営審議会委員が「動く委員」になって行くことも重要です。口だけ出すのではなく、手も足も動かし、その反応を公民館運営審議会に持ち帰ることも重要だと感じます。私自身も公民館運営審議会委員の学識で会議に参加すれば良いかなと思っていたら全然そんなことはなく、いろいろと振られます。私の公民館運営審議会委員経験10年はそういう感じでした。それが1回始めると辞められなくなり、私にとっても学生にとっても学びになっています。公民館にも何か還元出来ているかと思えます。行動する公民館運営審議会委員を目指さなければいけないと、自身に跳ね返ってくるのは分かっています。やってみることはすごく大きいことです。

広報の大切さやどう広げていくかを議論も出ましたが共通する課題として、若い世代、子供、働いている若い世代、子育て中の人といった、若い世代をどう取り込んでいくか今日の課題としてあります。若い世代が比較的多く集まっている大学で働いている私からするとヒントもたくさん得られたと思えます。大学や学校側は自分達の教育活動があり、その教育活動に噛み合えば、連携、協働をしていきたいと思っているはずですが。地域や公民館側の理屈や要望だけでは無理がありますが、自分達の仕事も活きつつ、公民館にも位置付くような連携があれば、どんどんできると思えます。学生が地域に出て行き協働して何か企画運営することは、社会教育の学びになることです。学生達も社会教育の現場で学ぶことは、大学で学ぶだけではなく、実践力が付くので、すごくこれはありがたいことです。就職活動に結び付くのに役立ち若者の成長にもつながると思えます。それは小学校、中学校、高校も同じです。社会教育主事養成校は増々現場とどのように結びつけようかと大学も求めて来ます。まちづくり、地域づくり、福祉を学ぶこと等、どんな学問領域でも現場で体験することを求めています。高校生はボランティア活動が進路の時、評価されどこでボランティアをやろうか探したりしています。うまくそういったものと組み合わせれば若い世代と連携することも可能ではないかと思えますので、今後、また、お互いの知恵やヒントを持ち寄っていったらと思えます。

第54回東京都公民館研究大会 参加アンケート 集計結果（協力：143人）

このたびは東京都公民館研究大会にご参加いただき、ありがとうございます。このアンケートは、今後において、よりよい公民館活動及び公民館研究大会のために、今回参加された方のご意見・ご感想を伺うもので、他の目的で利用することはありません。

各質問の該当項目（または数字）に○をつけ、また、その他（感想欄）には自由に記入してください。

○ 回答されている方についてお尋ねします。

- 申込区分 ・公民館職員（79人） ・公運審委員（39人）
 ・市民（13人） ・その他（10人）
 （その他の内訳：小金井市の企画実行委員、運協）

- 年齢 ・10代（0人） ・20代（4人） ・30代（16人）
 ・40代（15人） ・50代（46人） ・60代（28人）
 ・70代以上（27人）

- お住まい

自治体	人数		自治体	人数
小金井	17		羽村	3
西東京	13		東村山	3
福生	12		府中	3
国分寺	12		あきる野	2
小平	9		世田谷	2
東大和	8		立川	2
昭島	7		板橋	1
日野	7		稲城	1
狛江	6		杉並	1
町田	6		練馬	1
調布	4		武蔵野	1
国立	4		武蔵村山	1
八王子	4			

1 この大会を、どのような方法で知りましたか（複数回答可）

- ① ポスター・チラシ（12人） ② ホームページ（1人） ③ 各市の広報（6人）
④ 職員から（113人） ⑤ 友人・知人から（4人） ⑥ その他（16人）

その他内訳：

2 東京都公民館研究大会への参加は何回目ですか？

- ・ はじめて（32人） ・ 2回目（39人） ・ 3～9回目（55人）
・ 10回目以上（14人）

3 午前中の全体会（基調講演）について伺います。（○は1つのみ）

（1）参加した感想

- 1 とてもよい（42人） 2 よい（64人） 3 普通（22人）
4 あまりよくない（8人） 5 よくない（1人）

（2）全体会（基調講演）についての自由意見

教育機関の役割を改めて確認できた。その機関の本来的な設置目的の確認から、その事を実践するための職員の専門的力量形成と実践の工夫や努力の姿から公民館が学ぶこと大でした
公民館以外の講師でしたが、社会教育に通ずる内容が多く意味のある内容でした。公民館への挑戦状をたたきつけられた気分でした
地元の実践なので面白かった
社会教育の中でも公民館と違う領域でしたがヒントになることが少なくなかった
高尾先生のお話で楽しく公民館でもやれることはいくつもあることに気がつくことができました。生き生きと活動なさっている姿、参考にしたいと思いました。西武鉄道さん、ラジオ放送局ともに素晴らしかったです
多摩六都科学館をはじめて知った。体験を重視した取り組みが良いと思いました。是非やってみたいです
多摩六都の取り組み、とても分かり易く良かったです。子どもスタッフにはなにか条件があるのでしょうか。子ども食堂に来ている子どもをいかせたいなあと思いました
統一された2館の公民館活動のあり方について共通の試料を得られたのではないか
博物館の取り組みを知ることができた、公民館の活動を見直す上で大変参考になった

博物館と公民館の違いは有るが大きなヒントが得られた
博物館の取り組みを知ることができた、公民館の活動を見直す上で大変参考になった取り組みを今まで聞くことはなかったが、同じ社会教育施設の取り組みとしての事例や大変さやりがいなどヒントになるお話しであった
非常にパワフルに広範囲の地域との連携を進めており、多数の参考事例があり今後大きく役立つ
六都に一度も行ったことがなかったので、興味がわいてきました
ワークショップの企画・進め方や連携の可能性について公民館以外の社会教育の手法を聞いて良かった
分かりやすい内容で子どもを巻き込んだ企画は素晴らしいと思います。ただ申し込む子どもや家庭は教育力の高い家庭だと思う。申し込めない子をどうすくいとるかが課題だと思う
ご自分が工夫された事を分かり易くお話しされていて良かったです
この取り組みを聞いて公民館活動に大いに参考にし、今後さらに前向きに取り組む方向を視差していると思った
博物館のあり方と地域づくりが結びついていることは新しい発見になった
やりたいことが明確で、さまざまな経験を活かしながら自分が向かいたい方向へ向かっていく力を感じた。見守っていきたいと思います
大変有意義な講座、ワークショップのあり方を知ることができ、良い刺激になった
各市の現状が知れて良かった
西東京市に住んでいて、六都科学館に何度も見学に行っていたが、企画されている側からの活動を聞き、改めて企画の狙いが見えて参加していく見目が変わって面白いと再認識して良かった
博物館が地域と繋げる役割を持っていることが良くわかった
最初は違和感ある内容だったが、後半になり学びの場へのヒントが含まれ参考になった
公民館の役割が今まで分からず、少しずつ分かって良かった
児童館と併立する市民センターです。若者、ヤングママを取り組む市民参加の座学講座立案課題となっています。「壁」があって、克服できません。基調講演にヒントを見つけたと思います
小平市内の施設の紹介があり良かった
実体験に基づいた話で参考になった。現状の公民館活動とどう関連付けるか難しい

多摩六都の積極的な子どもを巻き込んだ企画運営に感動しました。科学館と連携した事業展開ができればと、また他の教育機関との連携を考えるヒントになりました
私の市も博物館があればと思いました
社会教育の一つである博物館の事例にたくさんのヒントをもらいました
具体的な話がたくさんあり、職員として参考になった。一方総論的な部分についても聞いてみたかった
科学館というフィールドで地域づくりという視点を入れつつ取組んでいることは素晴らしいことと思いました。地域と密着したワークショップのありかたも大変参考になりました
公民館の事業を考える上で参考になりました
まんねりした公民館の考え方を変えられるのではないかと
活動内容がとても参考になりました。見に行きたいと思います
ワークショッププランナーという職能が必要だと感じた
いつもと違った視点で公民館を見られたのは良かった
地域の資源を活かし、地域の方々に還元しようとする姿勢が良い。参考になった
新鮮な語り口で良かった
近くて遠い博物館、ヒントがたくさんありました
ボランティアの掘り起こし力が素晴らしいと思った
理想的な内容だと思った
社会教育の博物館事業について知ることができ、企画運営を考えるきっかけとなった
六都の取り組みがよく理解できました。今後の公民館運営に活かしたい
分かり易く、楽しいものだった。公民館とは違うが、取り入れられるものがあったら、是非工夫していきたい
指定管理の良さが出ている事例だと感じた。年間 432 個のイベントはすごいですね。それを 10 人でまわすことも専門性の高い職員だからだと思います
参考にできるところ、今後に活かせると思います
テーマが異なると思ったが、共通点も多く参考になった
お話に出てきた事業は大きすぎると思うが、事業を行うヒントになったと思う
公民館と博物館のコラボレーションによる講座などヒントとなる事が多かったです

もっと話を聞きたいと思った
博物館は今年度、文化庁管轄となるそうですし、社会教育主事も変化がありそうです
講師の方が地域とのつながりに努力されている事を感じた。久しぶりに科学館に行きたくなった
とても工夫されているようで刺激を受けた。科学、ジュニアというキーワードでの事業が少ないので参考にしたい
指定管理、民間活力との連携の形をきけて良かった
もともと地域の人材や資源を活かし、市民や地域を巻き込んだ事業が展開できるような気がしていました
勉強になりました
公民館とは違った取り組みを知れて刺激になった
博物館の事業は、公民館のこれからの取り組みにも共通する点が多く参考になった
とても興味深かった
科学館と地域のつながりがとても素晴らしいと思いました
博物館から公民館を学ぶという新しい経験ができた
博物館での地域参画プロジェクトをしているとはびっくりした
発表者の素晴らしい遍歴と、開催されている事業についてよく理解できた
講師のような自分の望む道を積極的に突進していくような女性が出てくる事を望む。そのためには、男性の理解、同姓の応援、社会態勢の整備、まだまだ課題はたくさんあります
多摩六都科学館の事を初めて知った。幅広い世代が集うには良い場だと思う。ご自分の体験を活かして働いている講師の方が輝いて見えた
博物館についてのお話しでしたが、公民館に置き換えて考えるきっかけをたくさん教わった
おひざもとの西東京市でこれだけのことが行われていたことに改めて気づきました。まだまだできることがたくさんあると気づきました
具体的な実践事例を中心とした話だったので分かりやすかった。講師が自分の考えや実践を語ることは良いと思った
若い講師の活躍、素晴らしいです
博物館とはなにかということを知れた
公民館研究大会で博物館の分野、しかも指定管理の立場の方の発表に公民館のこれからの方向性とまったく異なる感想を持ちました

午後の課題別集会へのつながりの部分についての話が少なかった
基調講演であるのでもっと総論的内容が良かったのでは。事例が博物館だけだったので観点が身近に感じられなかった
多摩六都科学館の紹介に関わる部分が大半だった。後半の他施設等の連携、担当者のシカケ、失敗談などをさらにお話いただければ良かったと思います
早口であること、画面が小さく見づらかった、横文字が多く理解しづらかったことがマイナス面
博物館の話、しかも指定管理者の館の話、人を集めることに力点（民間の発想）の話、これが公民館の大会とどう関係するのか、人選の問題では
どのように事業を作っていくのか、ニーズをどのようにとらえるのかという話がなくて公民館事業にどのようにつなげるのか分からなかった
素晴らしい企画だと思うが、専門性や事業規模性を考えると、一公民館で実施するには困難
文科省の組織改変に伴う博物館の位置づけについて、社会教育サイドからの視点をもっと欲しかった
どのように公民館に利用できるか
公民館活動の抱える大きな課題とは無関係で、主催者の判断に苦しむ。大切な時間が惜しい
興味深かったが、公民館に持ち帰ってどう活用するか難しいと感じた
内容が科学館のことに集中していた感があり、できれば課題別集会への導入へつながる事項をより多く提供いただけたらと感じた
体制、予算規模が少なくて参考になる部分が少なかった
スライドの資料が手元にあると良かった。進行、説明が早くついていくのが大変だった
若い世代へのアピールが大きかった。博物館も色々あるから、中高年への誘いになる話も聞きたかった
科学館の実施を公民館として結びつける具体的なイメージができなかった。限られた予算の中で考えていく内容ではなかったように思う
科学館の宣伝で終わってしまったような気がする。もう少し公民館に関する話が聞きたかった
ほぼやっていることの紹介だったので残念でした
テーマに即しての話が深まっていないのではないか。科学館の話がメインになってしまい、生涯学習、社会教育の課題とリンクしている部分が分かりにくかった

公民館事業については参考にならなかった。姿勢や資源活用については見習いたい
内容は興味深いものであったが時間の割りに盛りだくさんで意図が伝わりきらなかったと思う
質問時間を設けるべき
もう少し公民館とリンクした内容であれば良かった
博物館についての活動は理解できたが公民館研究大会としての講演ではいかがか
もう少し格調高い内容にして欲しかった
公民館関連の話で良かったのではないか
ポイントの分からない総論的基調講演より、各論的内容の事例報告の方が具体的で良い
博物館の活動を通して公民館に置き換えて考えるきっかけとなったが、もう少し公民館としての話を聞きたかった

第一課題別集会について

(2) 参加した感想

- 1 とてもよい (12人) 2 よい (13人) 3 普通 (3人)
 4 あまりよくない (0人) 5 よくない (0人)

(3) 参加の動機やねらい

地域の特色ある博物館をどうつくるか、学びたいと思いました
公民館がどう地域に寄与できるか学びたかった
職員研修の一環
公運審の委員長として
地域とのかかわりをどう考えるか、考えたいと思い参加しました
市民の課題を解決する手法があれば学び検討したい
サークルの持続可能な方法を知りたい
学識経験者の講演に期待して参加した
学びと地域づくりを公民館がどうつなげるか、考えたかった
公運審委員として勉強しようと思って
地域とのかかわりが重要だと思って
公民館事業のヒント得たくて

他市の現状把握と共に今後の仕事に役立つ情報を収集するため
あらためて学習したかった
テーマに興味があった
各地の意見を聞きたかったため

(4) 課題別集会（分科会）についての自由意見

ディスカッションでいろいろな話が聞けて良かったです
講師の話は参考になる部分が多かった。事例では理想ではあるけど、目指したい
他市の状況をうかがうのに大変良い機会でした。自分のところに持ち帰りなにかできるか考えたい
課題を見直すことができました
公民館の課題について他の公民館の方からもお話を聞くことができました
今問題としている内容のために、大変参考になりました。今後検討していくべき課題が見えました
アウトリーチについて皆さんと話ができて良かった
各市の職員の方などから意見が聞けて良かった。それぞれの課題が聞けました
他市の職員や利用者の話が聞けて良かった

第二課題別集会について

(2) 参加した感想

- 1 とてもよい (13人) 2 よい (14人) 3 普通 (1人)
 4 あまりよくない (0人) 5 よくない (0人)

(3) 参加の動機やねらい

評価が他市でどのようになっているかが知りたかった
公民館の振り返り、見直し。他分科会を知りたかった
講座の評価の仕方に関心があったので参加しました
一部の特定の市民が利用している公民館というイメージを持っています。講座の開設や教室の貸出だけでない市民との関わり方が学べればと思って参加した
評価に関しては深く考えたことがなかったので参加した
評価というところに興味を持ちました
価値が住民において希薄になっている昨今、どのようにすべきか、問題として捉えたかった

他市の取り組みを聞き、参考にしたい
地域のコミュニティづくりの資といたく、他地域の公民館活動や新しい風を感じられたらと参加しました
評価は当方も課題なので興味があった
公民館切りにつながりかねない評価について考えたかった
今後公民館評価を考えていく方向なので、参考になると思い参加した
公民館のこれからについて考える

(4) 課題別集会（分科会）についての自由意見

とても参考になりました
他市の公民館についてお話を聞くことができ勉強になった
良かった。勉強になりました
国立市、松本市のプロセス評価見える化評価、ストーリー評価が大変参考になりました。時間配分も内容も良かったです
国立市や松本市の取り組みと聞き大変勉強になりました。皆さんがさまざまな取り組みをされているのを参考に市民と一緒に作っていく公民館のあり方を考えて生きたいと思います
公民館の独自事業評価については作文になってしまう恐れがあるのではないかと。行政の力の入れようで大きな違いが出てくる
市民と職員が一緒に評価する意義が理解できた
貴重な取り組みが詳しく聞けて良かった。公民館は集まり続ける、話し合い続けるという、国立公運審委員の三好さんの言葉が印象に残りました
立場の違う方の意見が聞けて良かったです。行政に対する不満の訴えをされる方がいらっしやいましたがもう少しよい方向で話を進められたらと思いました
大きなテーマだと思っていたが、事例報告、講師の講演共に明確で分かりやすいお話しでした。グループ討議も参考になるお話しが多く共感しあえたことが良かった
国立市の事例がとても参考になった。講座参加者からはアンケートで感想を受けているが、生の声を聞き、討論することも大切だと思う
松本市の研究集会の内容は今後の地域づくりの先駆的な事例であると感じた。大変示唆にとんだ取り組みであり、俯瞰的な概要が分かりとても有意義だった。国立市の評価のありかたとしての講座ふりかえりも勉強になった
公民館のありかたが問われている今、事業評価や価値を改めて考え直すきっかけとしたい

評価の学習が良かった
研究集会、振り返り会にかわる仕掛けを考えようという気持ちになれた。企画委員方式のものについて、企画事業説明会や成果報告会を実施し行政管理職を招いたらよいのではないかとアイデアがわいてきた
市民参加の評価をスタートしたいと思った
公民館のありかたが問われている今、事業評価や価値を改めて考え直すきっかけとしたい
国立市のふーりかえる会について、思い切ったことをすると感心

三課題別集会について

(2) 参加した感想

- 1 とてもよい (10人) 2 よい (19人) 3 普通 (8人)
 4 あまりよくない (1人) 5 よくない (0人)

(3) 参加の動機やねらい

今後の公民館講座の選択に際して、参考にしたいと思った
魅力ある講座をどのように作っていくか学びたかった
魅力ある講座づくりを学びたかった
他市の講座の仕組みや様子を知りたくて
講座や事業を企画する中で難しいこともあり、得るものがあればと思い参加した
今までとは違う視点、きっかけづくりのため
魅力を出す術を知りたかった
経験が浅いため、学習したい
魅力的な講座の定義を知りたかった
公民館職員としての日が浅く、魅力ある講座づくりについて学びたかった
来年度職員部会担当市になるため
日々の業務のヒントになると思い参加した
講座を企画運営するに当たり、魅力のある講座って何なんだろう、一人でも多くの市民に受講後も有意義な生活人生を送っていただける一助となる講座を実施できるか気に留めています。その秘訣を学びたいと思い参加しました
今後の公民館の取り組みに活かすため
他自治体の成功事例を参考にしたい

他市の事業実践を学びたい
どうしたら魅力ある講座を行えるか模索中のため
講座の企画運営をする立場から、どのような対応を行えば一層魅力あるものができるかを学ぶため
魅力ある講座作りを学びたいと思った
今後の講座の参考にしたい
今後の企画の参考にしたい
公民館が行政上の理由で、生涯学習構想に吸収されていく状況の中で、公民館がその存在を確立していくにはやはり質の良い講座の実施、専門性を備えた職員の配置が大切だと思う
魅力ある講座のテーマに魅かれて参加した
公民館ならではの魅力を勉強したかった
講座企画にもう一つ工夫、努力が必要と感じたから
講座作りにもいつも悩んでいるので
普段来ない社会人や、高齢男性を引き込むヒントを得たかった
地域の課題を知り今後の公運審の会議に活かしていきたい
職員として講座づくりは大切なテーマだから
魅力ある講座づくりについて、他市の考えと工夫を意見交換したかったので
他の同業者が何を考え仕事しているのか知りたいと思いました
今後講座を企画したいと思っているので他市の状況を知りたかった

(4) 課題別集会（分科会）についての自由意見

子育て世代が講座をやりたがっているので、参考になった。保育室がすべての公民館にあるわけではないこと、どうしたらよいか考えなくてはと思った
実際に行うのは難しいが、魅力ある講座については理解できたように思う
他市の講座の事例や体験談などはこのような場でないと聞きづらいので大変良い企画だと思う
グループワークの時間に様子を聞くことができ良かった
職員と公運審の比率が同じくらいだと様々な話ができると思った
参考になりました
参加人数＝魅力ではなく、個人が感じるものであると感じた。地域の環境や、ターゲット層の課題などをしっかり把握して企画・運営していきたい
グループワークにもう少し時間が欲しかった
他市の状況が参考になりました

テーマに沿って具体的意見も聞けて良かったです
他市の方々と意見を出し合う時間が思ったより少なく感じるほどそれぞれの市の方の意見が非常に刺激になりました
グループ討議で他市の職員、公運審委員、企画実行委員からいろいろな話が聞けて良かった
立場の違う方からの意見が参考になった
助言者のお話は勉強になった。グループワークの際に、話が広域にわたってしまい、的を得ないものになってしまった。コーディネーターの役割が重要だと思った
助言者、事例報告者そして他市町村のお話を伺いとても参考になりました
具体例や色々な思いを聞くことができて良かった
とても良かった
一時間では語りつくせない嫌いがあるが参考になった
話し合いのしやすい事業例だと感じた
グループワークにより、自身のみでは見えにくい事をいろいろと感じられた
問題点、改善点など分かり易く説明されていた
各自治体によって講座の内容、質が異なっていて面白かった。少人数の話し合いは時に一人の意見に流される事を実感した
子育て対象講座では、親子とも参加講座は子育て講座になってしまうので、保育は別にした講座も実施して欲しい
貴重な話をたくさんうかがえて良い学びとなった
事例報告でこれだけ批判されることってあまりないですよ。逆に面白かったです。良い選択だと思います。改めて考えさせられました
各市のお話が聞けてとても参考になった
事例報告の2件とも簡潔で良かった。グループ討議の課題として活用しやすかった
工法の説明を分かり易く工夫していることや問題点に対して改善策を考えることが魅力ある講座へつながると感じた
知らなかったほかの施設の様子などを知ることができて良かった
多くの方々と意見交換することで気づく点もあり参考になった
事例報告者が努力・目標としてきた事を発表され感心したが、講師の評価が厳しいと感じた。どのような形の評価が望ましいか教えて欲しい
グループワークは隣と近く自分たちの会話が聞こえづらかった
やや期待はずれの事例報告だった。助言者の話が長すぎる

第四課題別集会について

(2) 参加した感想

- 1 とてもよい (25人) 2 よい (15人) 3 普通 (1人)
4 あまりよくない (0人) 5 よくない (0人)

(3) 参加の動機やねらい

公民館が事業目的としてテーマを位置づける力量が問われる。館と市民の力量が問われると思う
勉強のため
公民館の未来を考えあうため
公民館と学校、地域とどう連携していけばよいか考えるヒントを見つけたい
他市の活動内容を知るため、他市の目で自分の市の長所、短所を知らされました。参考にしたいと思います
発表をさせてもらいました
他市の取り組みや事例を参考にするため
公民館を知ってもらうためにはどうしたらよいか。公民館、地域、学校の連携のヒントを得たい
公民館の今後について情報交換したかったから
講師にお世話になっている関係だから
公民館業務に活かすため
自己研修のため
グループ討議が行えるということだったから
狛江市の公運審をしていたこともあり、今年の中中央公民館のつどいの実行委員にもなった。公民館をもっと魅力的な場所にしたいと思っていたので、良い機会と思い参加した。公民館職員の皆様、準備お疲れ様でした
地域と公民館の課題を考えたいから
問題解決の一助とするため
公民館への集客増をどうしたら可能か皆さんの意見を聞きたく参加した
地域との連携の手段を知りたい
「地域と公民館」「地域学習」に関心があったから
「地域と公民館」を学習したく参加しました
次年度の公民館事業の参考として
公民館の中から外に出る活動事例を知りたかった
公民館の活動が地域にどう関わったらよいか知りたい

事例発表を聞きたかったから
講座担当として、市民が求めているニーズをどうしたらとらえることができ、形にするかを学びたかった

(4) 課題別集会(分科会)についての自由意見

グループ討議中心ということで参加しましたが、少し事例の時間が長かったように感じます。もう少し助言者の意見を聞きたかった
皆さん熱心で素晴らしいと思った
非常に活発に意見交換がなされ、ヒントも多かった
学校と公民館とのつながり方一小学校に家庭科専科のようなものを置いたらどうか
他市の事例が聞けて良かった。グループ学習はうまくまとめられず。どこも同じ課題、関心ごと。特効薬は中々見つけられず。若い世代の声を拾える場にかけていき、学習テーマを探る
時間の配分がちょうど良かったです
他の自治体といろいろな話ができ良かった
皆さん公民館が好きでなんとかしたいという思いが伝わってきた
まとまらなかったけれど皆さんの意見が聞けて良かった
各自治体が悩んでいる問題に共通点が感じられたことは収穫でした
さまざまな地域の職位や公運審の方とお話できて有意義な時間だった
課題を他の市だけに求めず、自分たちの活動に取り入れていく必要性を実感
他市の事例、課題について意見交換でき、今後の業務に活かしたり参考になった
まとまった時間、グループで話すことができたので交流が深められて良かった。事例発表も各市の特徴ある内容で今後の参考となった
他市の情報を聞くことができた
グループディスカッションが良かった。活発に意見が出て深まった
かなりの時間討議できたことが良かった
公民館は「学びの場」から「集いの場」になった
公民館のこれからの参考になったように思う。社会教育については公民館の役割は大きいと思うが、少子高齢化、働き方の変化があり公民館はあるがどう連携して生かしていけばよいか・・・
悩みはみな同じ。ちょっとしたきっかけから偉大な展開に進めるヒントが得られた

グループ討議では、様々な経験を持つ方々の意見を聞いて参考になった。事例発表は課題をふまえたうえで、講座から地域を発展した事例は見習おうと思ったが失敗例も見てみたかった
事例報告が良かった。討議の時間が充分取れて良かった。各地の公民館の状況が分かって良かった
参加した各市とも共通した課題を抱えているところが再認識できた。課題の解決に向けた講座の事例発表は、今後の参考になった
良いと思います
事例発表は具体的活動で参考になった。特に西東京市の子ども食堂が良かった
他市の取り組みや情報が得られて良かった。講師の先生のお話が分かり易く良かった
活発な討論ができて良かった
テーマ設定に沿って事例報告を深める討論を希望する

5 大会全体の感想や今後の公民館活動のあり方についてなど、自由にご記入ください。

公民館利用に対する利用者増の大切さとそれをどうやって成し遂げていくかの手法を研究し、他市の例をふまえながら実行していく必要を感じました
コミュニティ創造の場として協働の場として、市民に近い存在でありたい。分科会でのGWはテーマが良くわからない部分もあり、話がばらばらになる場面があったので、トークテーマをきっちり設定していただけるとより効率的に進められたと思う
年に一回でもこのように色々な関係の方が一堂に会して話し合うことができる場は貴重だと思います。継続していく大切さを実感します
情報交換をする時間がもう少しあると良いと思いました。準備など大変だったと思います。お疲れ様でした。参加して良かったです。ありがとうございました
公民館は地域の情報発信基地である。その前に情報共有できる場「核」となるようなイチに、また地道に公民館へ目を向けてもらえるような「キッカケ」づくりができると良いのでは？いろいろな施設が点在しているものを公民館がまとめていくような方向で行くと良いのでは。まだまだ知らない人、敷居が高いと思っている人は多いのではないか
国立市、松本市の発表はとても参考になりました

行き届いた運営で楽しく充実した一日となりました。どうもありがとうございました
科学館の事業やマニュアル的に評価事業を実施している事例に大いに刺激された
昼休憩があと15分欲しい
とても役に立ちました
他の市の公民館職員と様々な話を聞けることはとてもありがたい。他の課題の記録をいただけたらうれしいです
地域の中で求められる公民館の役割について考えさせられました。主人公は住民であることについて改めて心に響きました
全体会は会場が広すぎたように感じた。研究大会を主催する市の負担が大きすぎる。非加盟市の参加がもっとあれば良かった
分科会の時間構成が厳しかったです
他の分科会の内容を知る方法があると言います
謝礼が低く、集客力のある講師の発掘が重要である
グループワークの時間は各市の意見や、講座企画の苦勞を聞くことができた
午前、午後両方全体で一緒に聞くようにしたほうが良いと思う
基調講演がとてもアグレッシブで感銘を受けた。先生のような人材が地域に欲しい
あまりお金をかけずにシンプルで好感が持てました。意見交流についても参考になりました
分科会での話し合いでみなさんの具体的なお話がしっかり聞くことができ良かった
午前に全体会、午後に課題別集会という形は良いと思う
現状のまま継続して欲しい
課題別集会にはもっと時間をとり十分な内容討議ができるようにして欲しい。都公連としてこれからの公民館のあるべき像についての提言をして欲しい
今後も積極的に参加します
1～2月の実施は体調不良の人も多いので時期をずらしたほうが良いのでは？
基調講演は「博物館のあり方」というテーマなら適切だと思います。「公民館活動のあり方」として、現在向き合っている課題についてミクロ的な視点から、社会的な視点といったマクロの視点で事例紹介をまじえた内容などを今後期待します。また、指定管理は社会教育の運営でさまざまな課題があるはず。どのような立場の方を講師に立てるかも重要だと思います

<p>ずっとずっと「公民館」が抱えるものって同じテーマですよ。「どう公民館をアピールしていくのか」公民館関係者の方がた総じてアピールが下手です。もったいない。自信をもってアピールし続けましょう</p>
<p>学校に合うかたちで公民館事業を進めたらどうか、副校長先生に相談する、公運審の先生の中に学校教員が入っているとつながりやすい、高尾先生のお話を参考にしたい、小学生達に参加してもらえるように興味関心を持ってもらえるよう話したい、公民館から学校に出張していく</p>
<p>3市の事例は良い選考（研究大会として）だったと思います。公民館に携わる関係者のそれぞれの熱意を改めて確認することができた。公民館の重要性を再確認</p>
<p>都公連加盟市が減る中年1回研究大会を開く意義はとても大だと思う。当番市はとても大変なことだと分かっていますが、続けられればと思います</p>
<p>大きな大会の企画・運営お疲れ様でした。新鮮な全体会講演と参加型の課題別集会で充実した1日となりました。ありがとうございました</p>
<p>講座における費用対効果、少子高齢化対策</p>
<p>公民館のシステムに変化が必要であると思う。西東京市では教育的な公民館の位置づけが大きいと思う。もっと市民、地域の人々の中から自立した動きになったらよいと思う。それらの活動と公民館と一緒に考えていけたらと考えている。公運審の一人として自分自身のあり方を反省しながら活動していきたい</p>
<p>運営の職員の皆様お疲れ様でした。ありがとうございました</p>
<p>三多摩市の公民館状況、情報を交流し共有することは重要であるとあらためて感じた。これからも継続していただきたい</p>
<p>学校との関わり方の工夫が必要。場としての役割。活用していない人をどう取り込むか。多くの協議会、団体との連携の場作り。活動は楽しいことが基本。子育て世代の支援活動。地域の人材掘り起こし。利用者連絡会の活性化</p>
<p>他市の活動を知ることになりためになりました</p>
<p>都公連大会が今後とも継続できるよう強く望みます。また、脱退した市でも参加できるように参加者拡大をお願いいたします。個人で申込できるようお願いいたします</p>
<p>公民館で活動されている方は、当館では年齢の高い方が多く、土日でもその活動されている層は変わりません。趣味学習など今後も大きく変わらないと思いますが、若い年齢の人に使っていただけたらと思います。その方法などの決定打がありません</p>

第54回東京都公民館研究大会課題別集会参加状況

No.	市町村名	第1課題別集会	第2課題別集会	第3課題別集会	第4課題別集会	全体会	各市の合計
1	昭島市		5	3	6	14	14
2	町田市	4	3	6	3	16	16
3	小金井市	8	5	18	8	39	39
4	小平市	3	2	6	3	14	14
5	日野市	2	2	2	3	10	9
6	国分寺市	8	4	5	7	24	24
7	国立市	1	5	2	2	10	10
8	西東京市	7	5	5	9	26	26
9	福生市	3	2	6	6	17	17
10	狛江市	3	4	4	5	16	16
11	東大和市	4	2	2	2	10	10
12	立川市	1		1	1	3	3
13	調布市	2	2	2	4	10	10
14	東村山市	1	1			2	2
15	あきる野市			1	1	2	2
16	その他	1				2	1
17	(講師)				1 (参加者として)	1	1
18	(助言者)	1	1	1	1	4	4
19	(事例報告者)	1	5	2	4	12	12
計		50	48	66	66	232	230
						※全体会のみ参加者2人	

第 54 回東京都公民館研究大会記録

発 行：平成 30 年 6 月

編 集：第 54 回東京都公民館研究大会企画委員会

大会事務局：狛江市公民館

〒201-0013 狛江市元和泉二丁目 35 番 1 号

電 話 03-3480-3201

F A X 03-3480-3203